

ひら ぼら 平 原 遺 跡

—平成7年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

1996

財団法人 山口県教育財団

山口県教育委員会

序

山口県では、恵まれた自然環境の中、豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策が推進されています。

財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会では、私たちの郷土山口を築いてきた先人の足跡を今に伝える歴史的資産―遺跡―を、こうした開発工事との調整を図りつつ記録にとどめて後世に残すべく、県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財について発掘調査を実施しております。

平成7年度は、美祢郡美東町大字大田に所在する平原遺跡の発掘調査を実施し、古墳時代に営まれた集落跡を発見するとともに、当時の人びとの生活文化の実態を知る上で、数多くの貴重な手がかりを得ることができました。

本書は、その発掘調査の成果をまとめた記録であり、広く文化財への認識や理解のため、また、学術研究の資料として活用されることを期待するものであります。

終わりに、発掘調査の実施に当たって御協力いただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

財団法人山口県教育財団 理事長 小河 啓祐
山口県教育委員会 教育長 小河 啓祐

例 言

1. 本書は、県営ほ場整備事業に先立って平成7年度に実施した平原遺跡（山口県美祢郡美東町大字大田）の発掘調査概要報告書である。
2. 本書は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部の委託を受けて実施した調査と、文化庁国庫補助を得て山口県教育委員会が実施した調査の成果をあわせて報告するものである。
3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団
山口県教育委員会（山口県埋蔵文化財センター）
調査担当 財団法人山口県教育財団事務局指導主事 山本 義信
花岡 隆義
山口県埋蔵文化財センター文化財専門員 岩崎 仁志
4. 調査にあたっては、山口県農林部耕地課、山口県山口土地改良事務所、美東町建設課、美東町教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。
5. 本書の第1図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「秋吉台」を複製使用したものである。第2図は美東町建設課農林土木係提供のものである。
6. 本書に使用した方位は、国土座標（第3座標系）で示し、標高は海拔標高である。
7. 本書に使用した土色の色調の表記はMunsell方式による。
農林省農林水産技術会議事務局（監修）「新版標準土色帳」
8. 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
9. 土器の断面は、黒塗りが須恵器、白塗りが土師器を表す。
10. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
SB：建物跡 SK：土坑 SP：柱穴 SX：不明遺構
11. 本書に掲載した実測図・写真の作成および執筆は、山本・花岡・岩崎が協同で行い、岩崎が編集した。

目 次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	3
III	遺 構	7
	(1) 竪穴住居跡	
	(2) 古墳時代の掘立柱建物跡	
	(3) 不明遺構	
	(4) 土坑	
	(5) 中世の掘立柱建物跡	
	(6) 河川跡	
IV	遺 物	18
V	まとめ	24

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡……………1	第11図	不明遺構実測図……………15
第2図	調査区設定図……………4	第12図	土坑実測図……………15
第3図	遺構配置図……………5・6	第13図	中世の掘立柱建物跡実測図①……………16
第4図	竪穴住居跡実測図①……………8	第14図	中世の掘立柱建物跡実測図②……………17
第5図	竪穴住居跡実測図②……………9	第15図	河川跡土層断面図……………17
第6図	竪穴住居跡実測図③……………10	第16図	出土遺物実測図①……………19
第7図	竪穴住居跡実測図④……………11	第17図	出土遺物実測図②……………20
第8図	竪穴住居跡実測図⑤……………12	第18図	出土遺物実測図③……………21
第9図	古墳時代の掘立柱建物跡実測図①……………13	第19図	出土遺物実測図④……………22
第10図	古墳時代の掘立柱建物跡実測図②……………14	第20図	遺構出土の須恵器組列……………24

図版目次

図版1	平原遺跡遠景、平原遺跡近景
図版2	平原遺跡調査区全景、平原遺跡南東側住居群
図版3	S B 01、S B 04、S B 04竈
図版4	S B 03、S B 05、S B 05竈
図版5	北東側住居群、S B 10、S B 08
図版6	S B 08竈、S B 08土器出土状況、S B 11
図版7	S B 06、S B 07、S B 13
図版8	S B 15、S B 14、S B 14土器出土状況
図版9	S B 19、S B 19竈、S B 23・24
図版10	S B 28、S K 09、S B 34
図版11	出土遺物 ①
図版12	出土遺物 ②
図版13	出土遺物 ③
図版14	出土遺物 ④

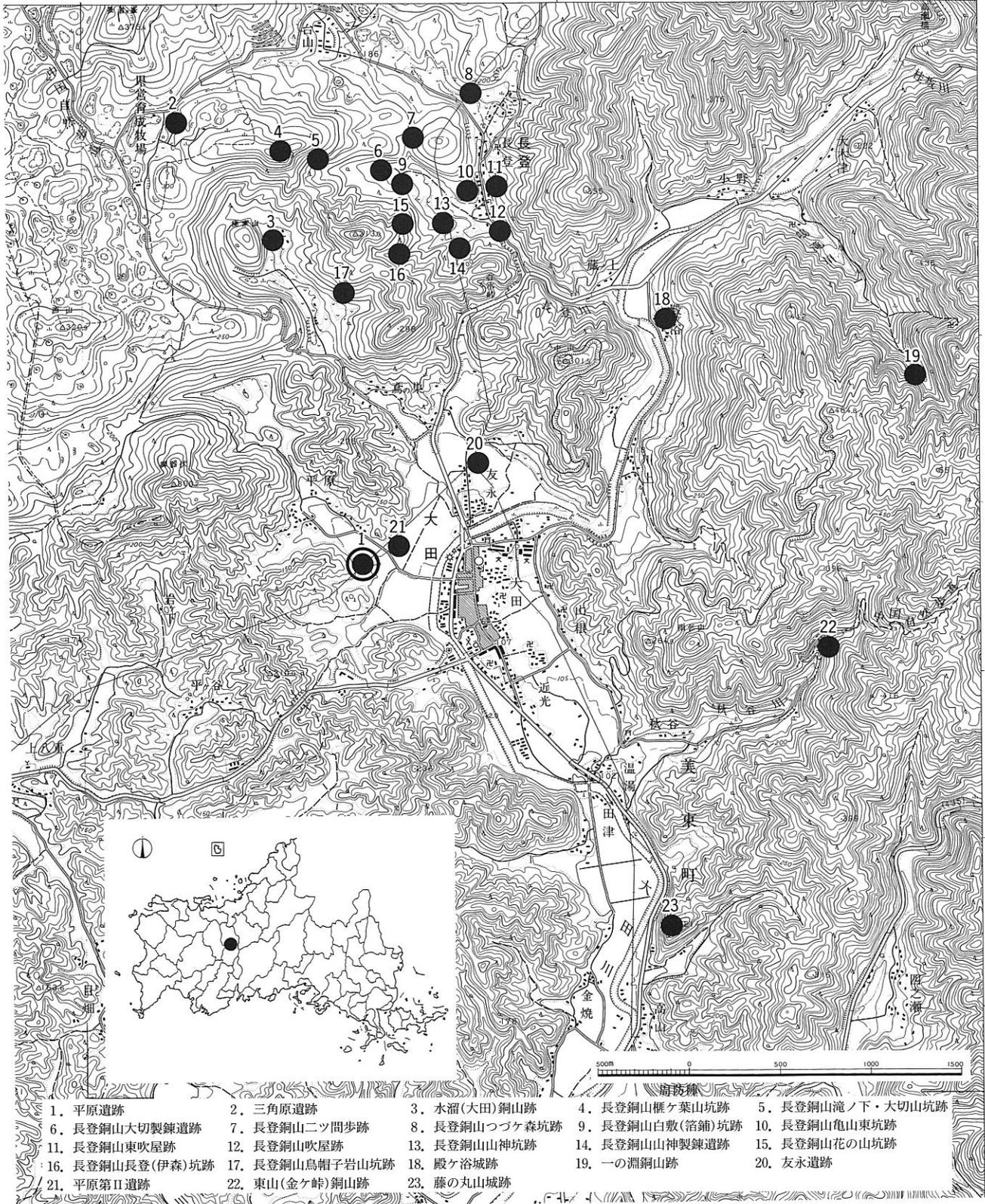
表目次

第1表	竪穴住居跡一覧……………7
-----	---------------

I 位置と環境

平原遺跡は、美祢郡美東町大字大田に所在する古墳時代後期と中世を中心とする集落跡である。

美東町は、山口県のほぼ中央部にあり、西にカルスト台地秋吉台で有名な秋芳町、南東に県都山口



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

市、北を日本海に面する萩市・長門市に境を接している。町の北から南東側にかけて、標高500m～700mの山々がそびえ、西側は秋吉台から続く比較的なだらかな標高200m～300mの山々が連なる。この山々の谷間をぬって、大田川が町を南北に横切るように南流し、秋吉台の西を南流してきた厚東川に注ぐ。このため、平地が少なく、大田川の幾度とない氾濫と浸食・堆積の繰り返しによって形成された谷底平野が大田川に沿ってわずかに広がっているだけである。この平地を国道490号が通り、山陽と山陰を結ぶ。さらに、山口市と秋芳町を結ぶ国道435号が美東町で国道490号に合流し、再び分岐する。このため、重要な交通の要所となっている。

本遺跡は、南北に長い美東町のほぼ中央部西側に位置し、カルスト台地秋吉台から南東に連なる小起伏山地から北東にのびるなだらかな丘陵の先端部にある。この脇を谷筋が南東にはしる。谷筋をはさんだ北東200mの位置に平原第II遺跡がある。両遺跡から縄文時代から中世に至るまでの遺物が出土したことから、この地は常に人々の生活の場となり、生業の場であったのであろう。

さらに遺跡の周辺には、縄文時代から中世の遺跡が数多く点在している。しかし、多くの遺跡はほとんど発掘調査されていない。代表的なものは、縄文時代の遺跡として、長者ヶ森遺跡・三角原遺跡・馬コロビ遺跡などが平原遺跡の北西にある秋吉台の台地上にあり、周知の遺跡として知られている。また、発掘調査で縄文晩期の土器片が出土した神田遺跡は、美東町の南端の江嶺山から西に延びる舌状台地にある。遺構については、残念ながら確認されていない。弥生時代の遺構として、絵堂の松原遺跡と綾木の岡の台遺跡が、町内屈指の集落遺跡として知られている。古代以降の遺跡として詳細な資料が得られている長登銅山跡と銭屋遺跡は、県内屈指の遺跡である。長登銅山跡は平原遺跡の北側2kmにあり、青銅塊の化学分析結果から、奈良の大仏の料銅は長登銅山産であることが判明し、脚光を浴びた。調査の結果、精錬作業面や須恵器・土師器・製塩土器などが検出され、奈良時代の遺跡であることが確認された。さらに、墨書須恵器の出土によって役所施設の存在を示すものものとなった。また、平原第II遺跡から官営工房跡と思われる掘立柱建物跡と鉛製錬跡が見つかり、長登銅山跡と関連する遺跡であるのではないかと考えられている。銭屋遺跡は平原遺跡の北10kmの位置にあり、寛永通宝の鑄銭所跡として全国的にも数少ない遺跡として貴重である。今回の調査と前年の調査で古墳時代の集落跡を確認できたことは、長登銅山や周辺の遺跡とのつながりを知る上で貴重な資料となった。

時代とともに人々は、秋吉台の台地上や周辺の山々から延びる丘陵上から、大田川沿いの谷底平野際へと居住の場所を変え、長登銅山移動に伴い新に居住の場所を変えていったであろう。

- 参考文献 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会 『立石遺跡』 1988
財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会 『神田遺跡』 1990
山口県教育委員会 『銭屋』 1987
美東町教育委員会 『長登銅山跡Ⅰ』 1990
美東町教育委員会 『長登銅山跡Ⅱ』 1993
美東町教育委員会 『長登銅山跡』-古代採銅・精錬遺跡発掘調査略報- 1993
山口県 『土地分類基本調査-山口-』 1975
山口県埋蔵文化財センターニュース第8集 平原第II遺跡 1995

II 調査の経緯と概要

山口県各地で推進されている県営ほ場整備事業は、農業生産基盤の整備を目指すものだが、同時に地下に眠る貴重な埋蔵文化財を破壊する可能性も高い。山口県教育委員会では、県営ほ場整備事業対象地区内の埋蔵文化財を保護するため、あらかじめ遺跡の分布調査を行い、確認された遺跡については現状保存を前提に山口県農林部耕地課と協議を行う。現状保存の困難な遺跡については、事前に調査し詳細な記録保存を行うようにしている。

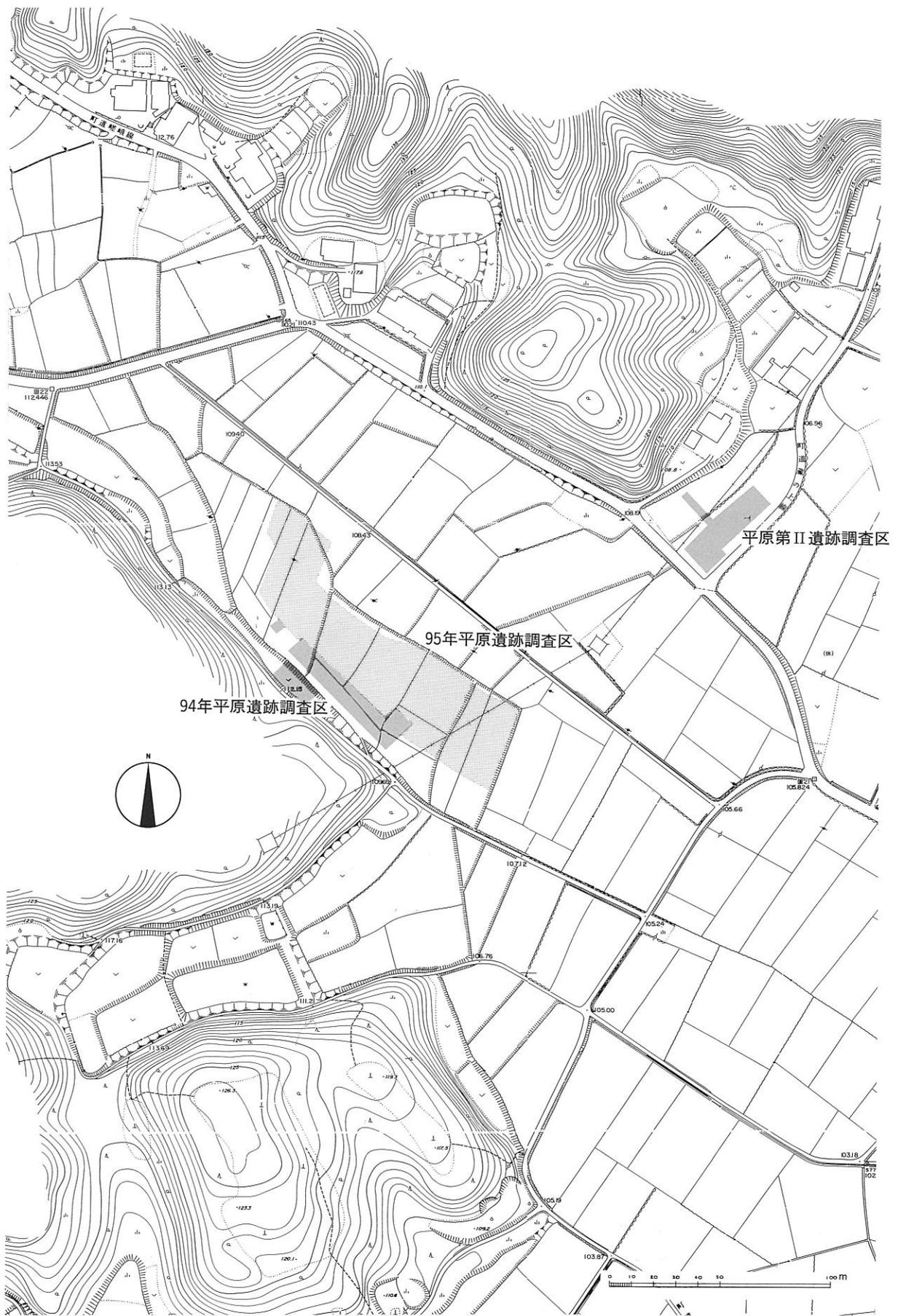
大田地区における県営ほ場整備事業は平成7年度に施行予定されたため、平成6年12月に分布調査を実施した。その結果対象地区内に文化財が眠っていることが判明した。また、その隣接地を平成6年度に美東町教育委員会が発掘調査を行い、県内最大級の方形竪穴住居跡をはじめ多くの遺構が見つかった。これらの資料をもとに山口県農林部耕地課と協議を行い、現状保存の困難な4,000㎡について発掘調査を実施することとなった。調査は財団法人山口県教育財団が山口県農林部から委託を、山口県教育委員会が文化庁の国庫補助を受け、両機関が合同で行うこととなった。

平成7年7月12日から調査を開始した。まず、分布調査の結果と美東町教育委員会の調査結果をもとに重機を使って遺構面直上まで表土除去した後、人力によって丹念に遺構を検出していった。その結果、多くの方形竪穴住居跡や9本の総柱の建物跡などの遺構が確認できた。確認できた遺構から平板測量を行い、遺構配置図を作成した。8月2日、調査区南東側の竪穴住居から掘り込みを開始し、掘り込みの終わった遺構から随時写真撮影・実測を行った。真夏の暑い時期からの調査とあって、水を汲んで来ては固くなった土にかけ、すこし掘り進んではまた水をかけるという繰り返して、なかなか作業がはかどらない。しかし、どの遺構も後世の削平を受け予想よりも浅かったことや、作業員さんの頑張りのおかげで予定どおり全ての遺構の掘り込みを終えることができた。10月11日、絶好の天気恵まれ遺跡全域の空中写真を撮影することができた。その後、残った遺構の写真撮影・実測を進めた。10月14日現地説明会を実施し、発掘調査の成果を公開した。実際の遺構や遺物を見てもらうことで、ふるさとの歴史の一端を体感していただいたことであろう。10月19日、作業員の方々を始め、関係各位の多大な援助・協力により現地における全ての調査を終了した。

山口県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料を整理し、出土遺物の復元・実測を行いこの報告書を刊行した。



遺跡掘り込み風景



第2図 調査区設定図



第3図 遺構配置図

III 遺構

今回の発掘調査によって検出された遺構は、方形竪穴住居跡26軒、古墳時代の掘立柱建物跡5棟、中世の掘立柱建物跡と思われるもの5棟、土坑9基、柱穴約300個、河川跡及び不明遺構2基である。

これらの遺構は後世の開墾にともない、上面をかなり削平され、当時の規模からみればかなり浅いものになっている。特に調査区北西側は削平が著しいため、遺構の密度が希薄である。

以下代表的なものを取り上げ説明する。

(1) 竪穴住居跡 (第4～8図)

検出した竪穴住居跡は、出土遺物から6世紀後半から7世紀前半のもので、S B01を除き調査区東側に集中していた。平面形は方形が多く、壁面の一方に竈が設置してある。いずれの住居も上面の削平が著しく残存状況はあまりよくない。とくにS B25は周溝の一部と4つの支柱穴のみが残存し、S B12・17は住居の一部が残るものであり、竈・支柱穴・周溝は確認できなかった。竈についても原形をとどめるものはなく、煙道が残っていたものは10軒のみであった。竈の設置方向も一定ではないが、住居の北側に設置されたものが多い。規模等の概要については、第1表(竪穴住居跡一覧)のとおりである。以下代表的なものを年代を追って概説する。

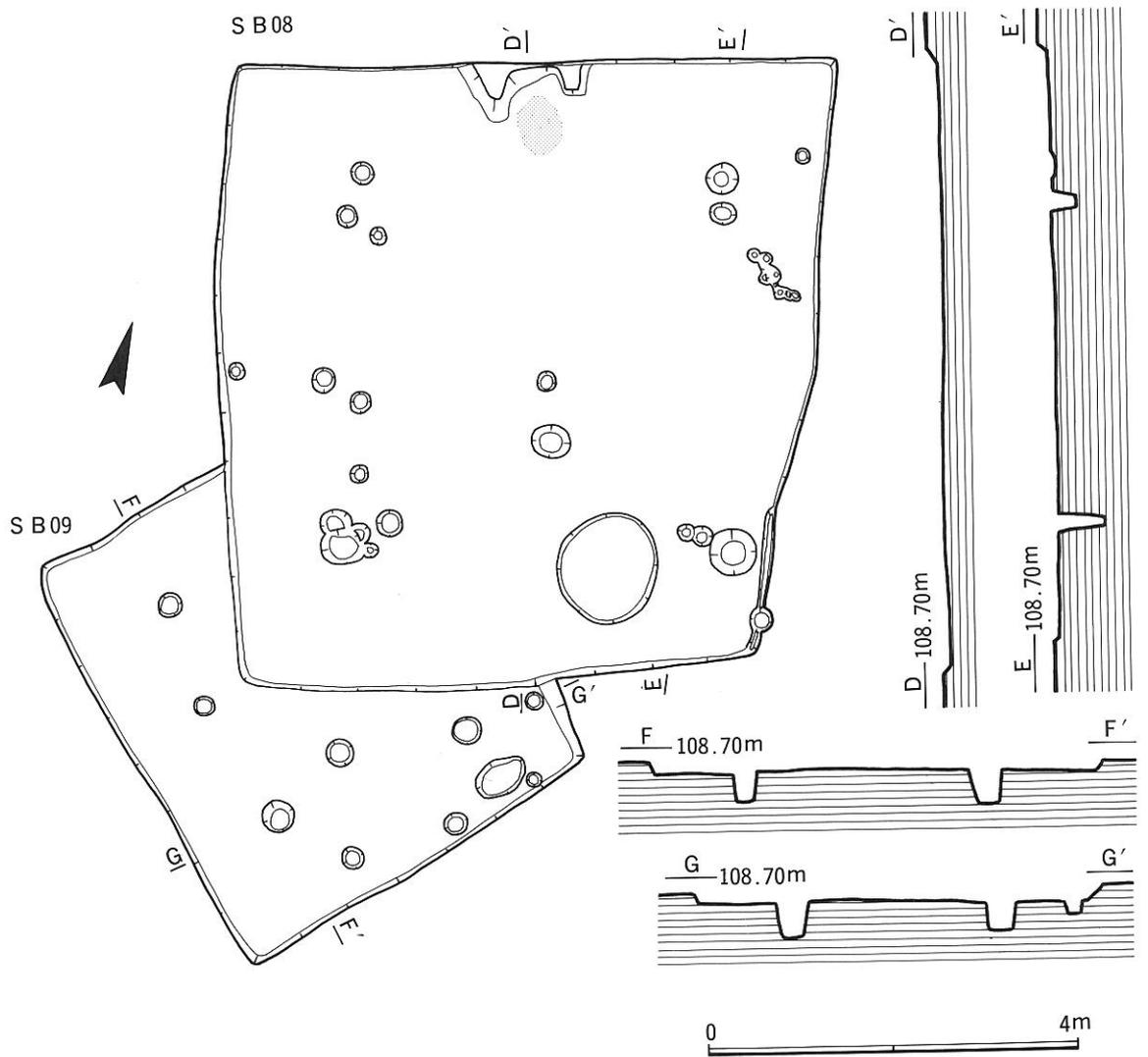
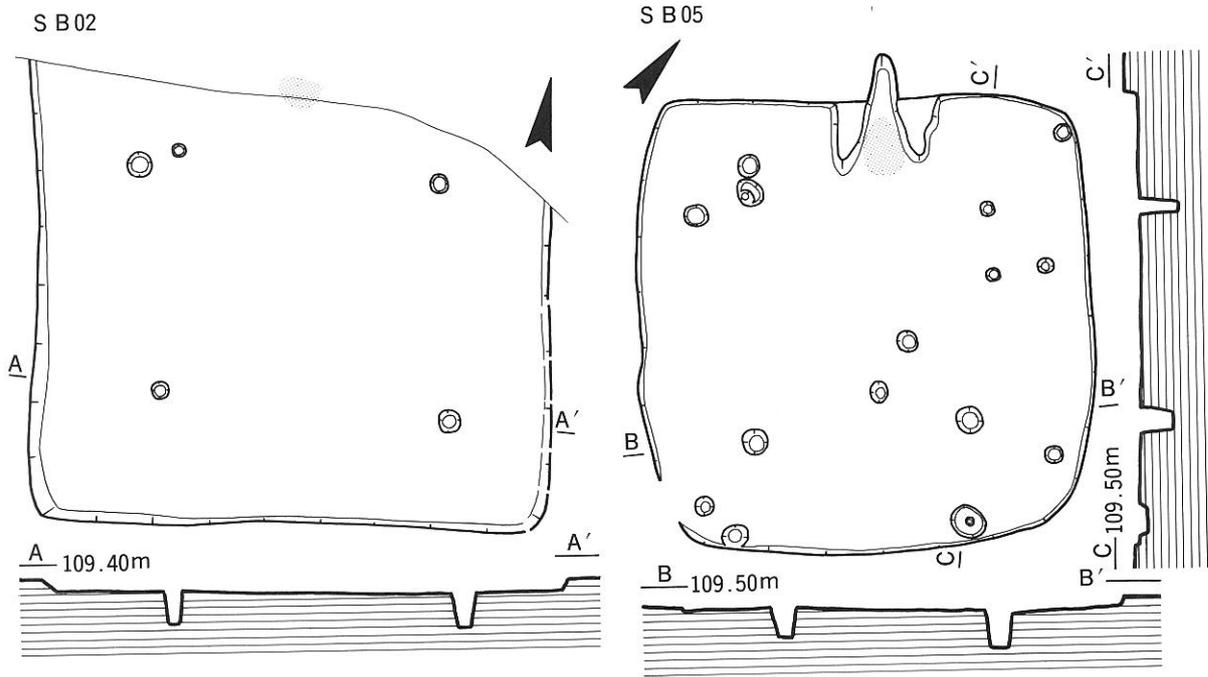
S B02 床面から出土した須恵器の杯蓋(第19図54)から今回検出した住居跡の中で1番古いと考えられる。支柱は4本。竈の焚き口部の焼土が住居の北側に認められ、そこから土製支脚が出土した。

S B08 S B09が廃絶後につくられる。今回検出した住居のうち最大で、床面積39.1㎡である。支柱は4本。住居南東側がS B10に隣接する。

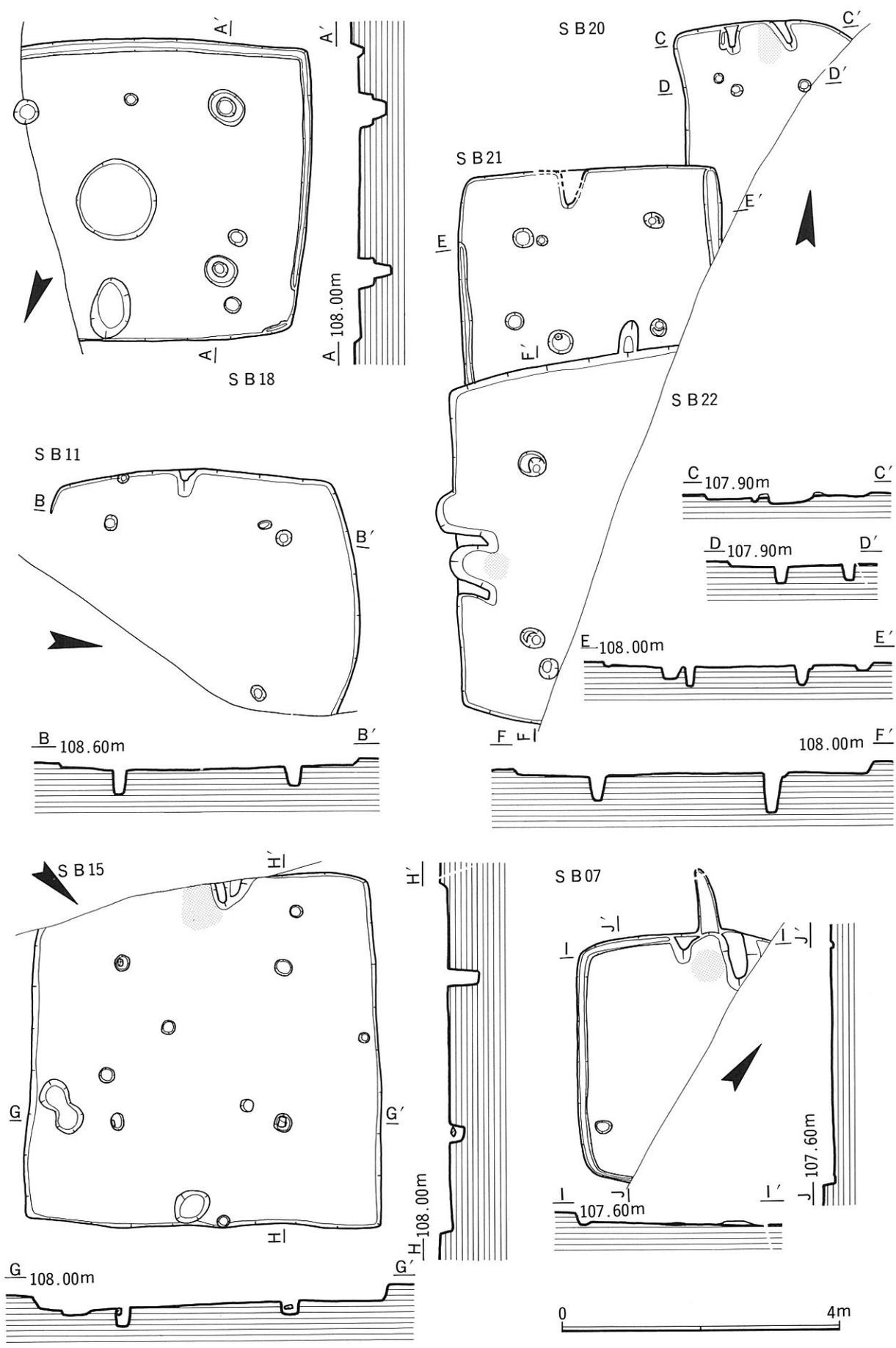
第1表 竪穴住居跡一覧

遺構番号	規 模			支柱	軸方位 長軸基本	竈の向き	主 な 遺 物	備 考	時 期
	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)						
01	410	—	18	4	N23°E	北	ミニチュア釜	煙道あり	7世紀?
02	541	—	15	4	N82°E	北	須恵器・土製支脚		1期
03	367	359	16	2	N49°W	北西	須恵器	煙道あり	5期
04	512	498	16	4	N24°E	西	土師器	煙道あり・一部に周溝あり	6～7世紀
05	481	480	12	4	N40°W	南西	須恵器・土師器	煙道あり	2期
06	422	374	20	4	N18°E	西	須恵器・土師器	煙道あり・一部に周溝あり	3期
07	357	—	16	0	N42°W	東	孔雀石・滑石製模造品・石鏃	煙道あり・周溝あり	6～7世紀
08	679	649	13	4	N17°W	北	須恵器		4期
09	488	427	14	4	N46°W	—			2期
10	528	481	16	4	N77°E	北	須恵器・土師器・土製支脚		5期
11	417	—	10	(4)	N7°W	東	須恵器・土師器・ミニチュア土器・土製支脚		4期
12	—	—	8	—	—	—		住居北隅のみ	?
13	502	464	8	4	N30°W	西	須恵器・土師器	煙道あり・一部に周溝あり	5期
14	479	458	26	4	N39°W	北西	須恵器・土師器・把手付き小型鉢・鉄器・石鏃	テラス状施設・煙道・周溝あり	3期
15	500	—	26	4	N41°W	南西	須恵器・土師器・土製支脚・土鈴		3期
16	410	—	19	0	N40°W	北西	土師器	煙道あり	6世紀?
17	357	—	7	—	—	—		住居の西一部	?
18	440	—	12	(4)	N20°E	—		一部に周溝あり	3期
19	418	377	11	2	N65°E	東	須恵器・土師器・石鏃	煙道あり・一部に周溝あり	5期
20	—	—	7	(4)	N15°W	北	須恵器		5期
21	381	—	5	4	N82°E	北		一部に周溝あり	?
22	517	—	30	(4)	N6°W	東			4期
23	301	288	30	0	N85°W	北	須恵器・土師器・滑石製紡錘車	周溝あり	5期
24	384	331	19	4	N66°E	北西	土師器		4期
25	—	—	—	4	—	—		支柱穴と周溝の一部のみ	?
26	616	—	(5)	—	N65°W	—		周溝のみ	6期

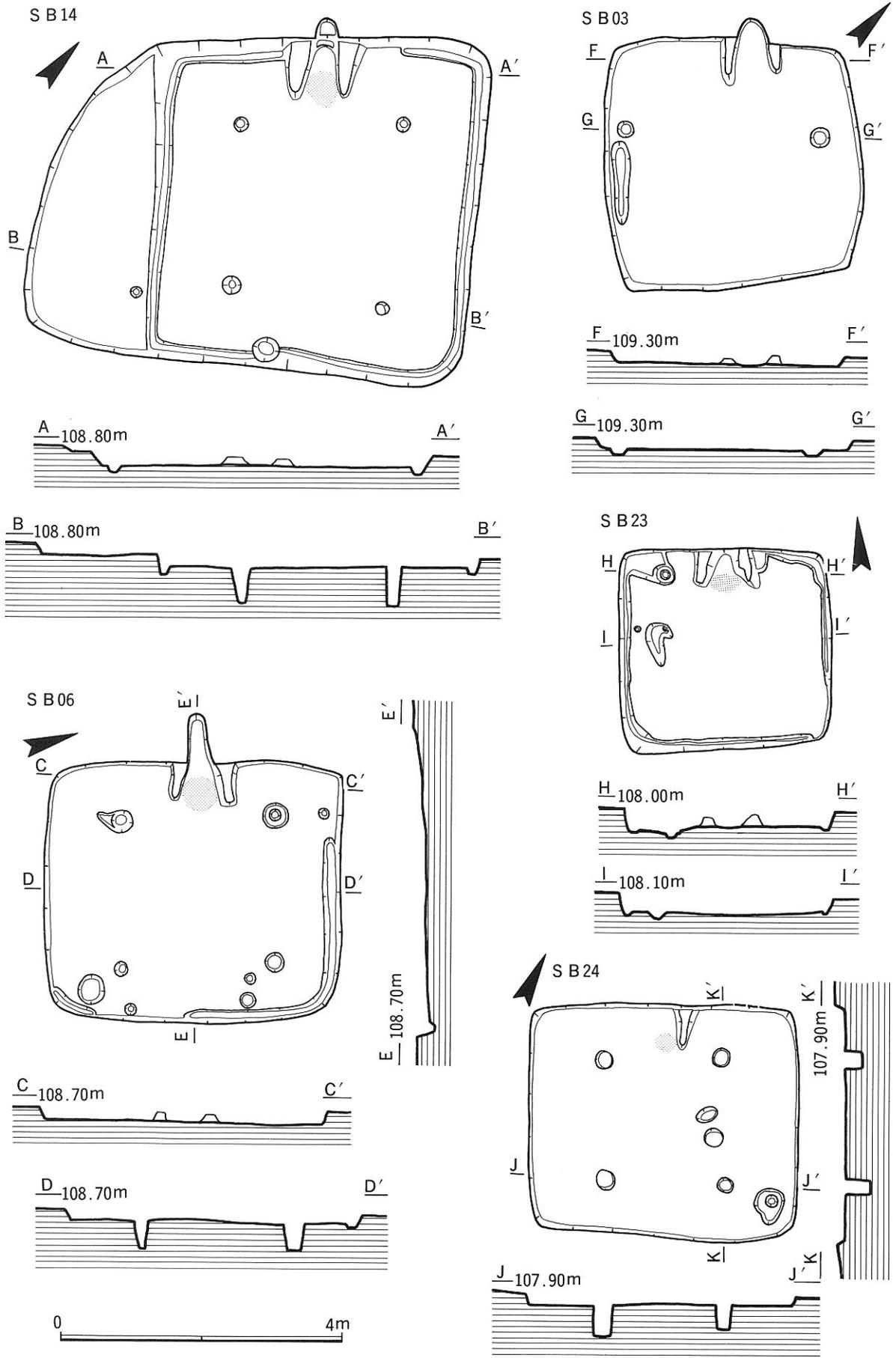
※時期については「Vまとめ」参照



第4図 竪穴住居跡実測図①



第5図 竪穴住居跡実測図②



第6图 竖穴住居跡実測図③

S B 22 調査区東端に位置し、S B 21を掘り込んでつくられる。住居北側に煙道と竈の焼き口部の焼土があったことから、いったん竈を築き使用した後、東側に竈をつくりかえていると考えられる。今回の調査では唯一の例である。

S B 15 調査区南東端に位置し、北側にS B 14、東側にS B 16が隣接する。支柱4本。竈の袖石と支脚が抜き取られず、そのままの状態に残存。竈の天井石は2つに折れ、左袖石の脇にあった。住居北

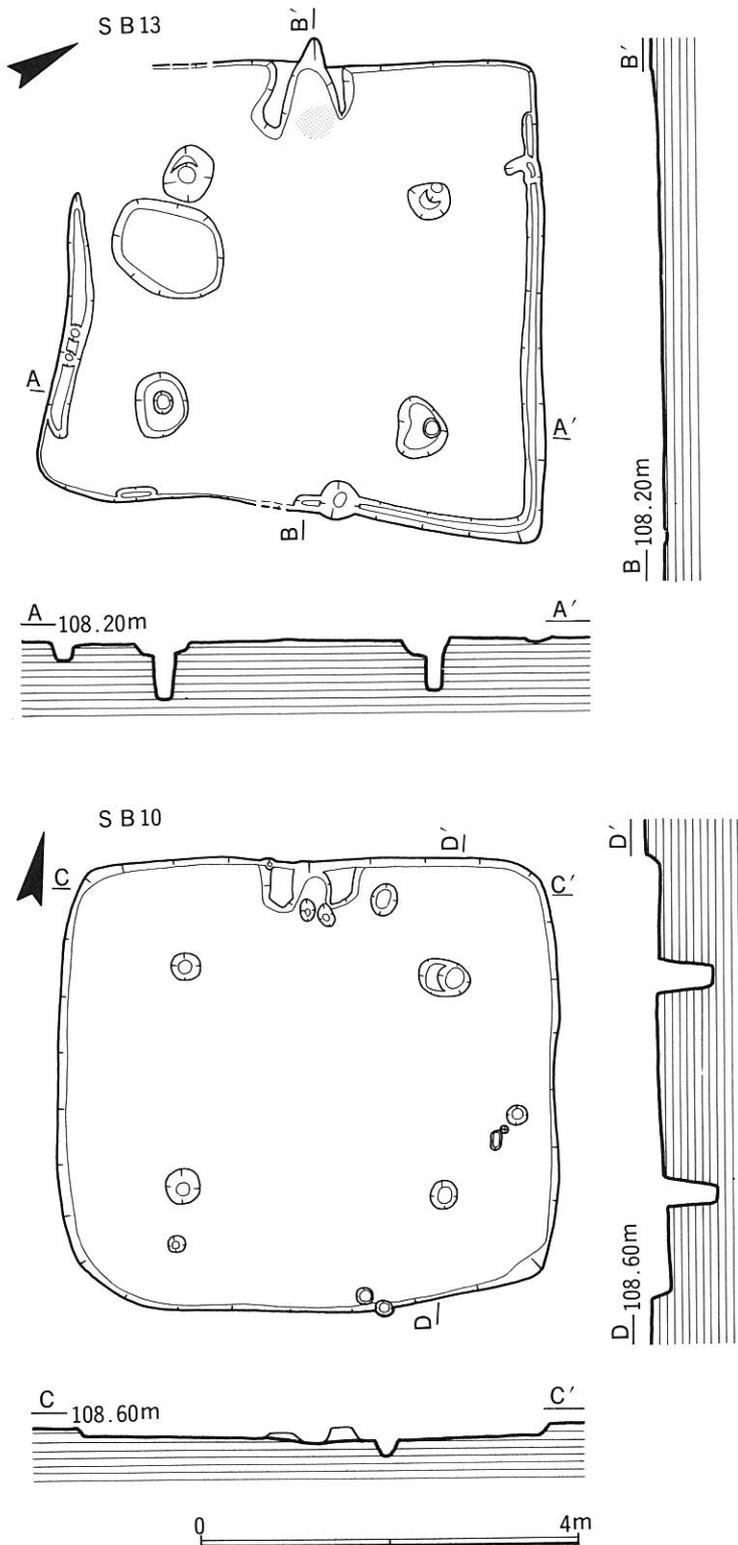
東区埋土中位から土師質の鈴（第16図08）が出土した。

S B 07 調査区北東側に位置し、西側に隣接するS B 06に煙道の先端を掘り込まれる。かなり削平されているが、竈には長い煙道が残る。埋土中から銅鉍石と滑石製模造品（第19図75）が出土。

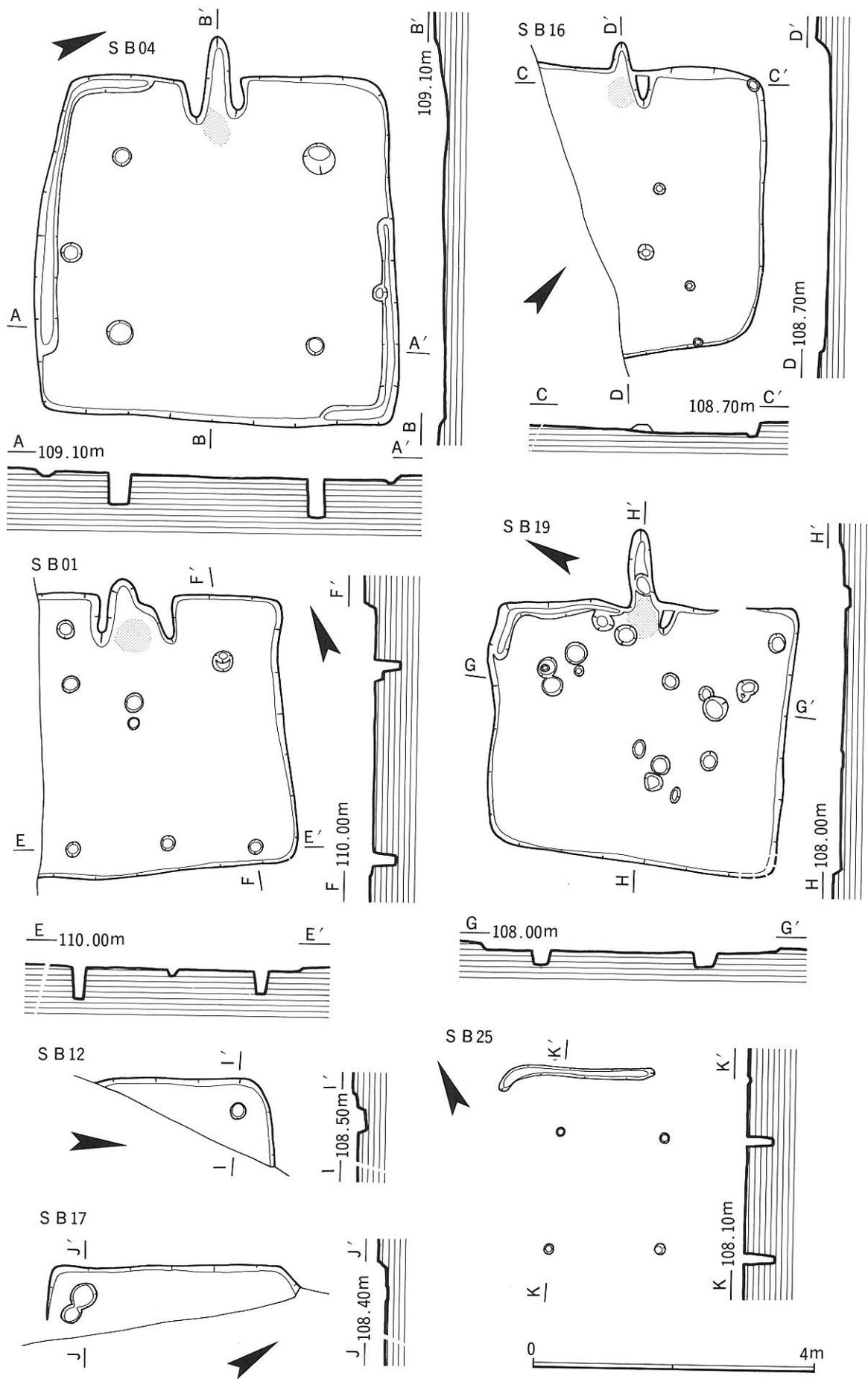
S B 14 S B 15の北側に位置し、周溝が竈脇から壁際に沿って巡る。南西側に住居に伴うと考えられる、幅最大で165cmのテラス状の施設が付随する。煙道の埋土から鉄器（第16図19）が、住居南東側周溝そばの床面から須恵器の杯身・杯蓋（第16図10・11）がほぼ完形のまま出土した。

S B 23・24 S B 23・24はS B 22の西側に隣接し、S B 23はS B 24の一部を掘り込んでつくられる。ともに北側壁面に竈を設けている。S B 23は最小の住居跡で、床面積7.6 m²である。壁際に周溝があり、西側壁際に屋内土坑を有する。住居南西区床面から滑石製紡錘車（第17図24）が出土。

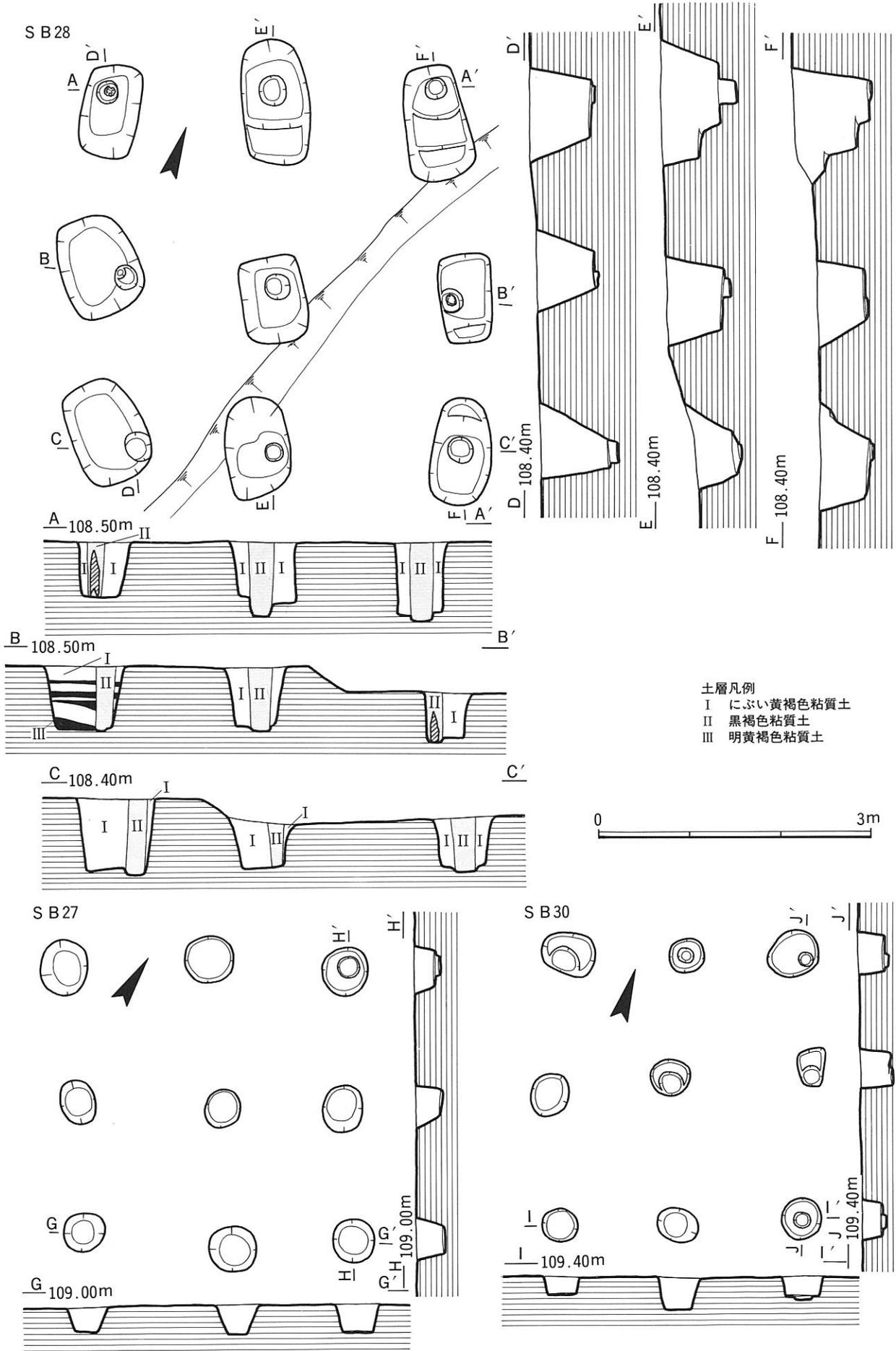
S B 04 調査区北側中央に位置し、南側壁際と北側壁際に周溝を有する。支柱は4本。竈は長い煙道をもつ。袖石はすこし移動し欠けているものの、竈内から検出された。埋土中から高杯（第19図61）が出土。



第7図 竪穴住居跡実測図④



第8図 竪穴住居跡実測図⑤



第9図 古墳時代の掘立柱建物跡実測図①

(2) 古墳時代の掘立柱建物跡 (第9・10図)

古墳時代の掘立柱建物跡は5棟ないし6棟発見された。いずれも調査区の東部に集中しており、基本的には他の遺構、特に竪穴住居跡とは一定の距離をもって営まれている。いずれも大型の掘形をもつ2間×2間の総柱建物であることから、倉庫としての機能を持つ施設であったと考えられる。

S B 28 (第9図) 古墳時代の掘立柱建物跡としては最大の規模をもち、全体として南北4.0m、東西3.6mの規模をもつ。柱穴は最大のもので南北138cm、東西74cmの平面形をもち、検出の時点ですべて

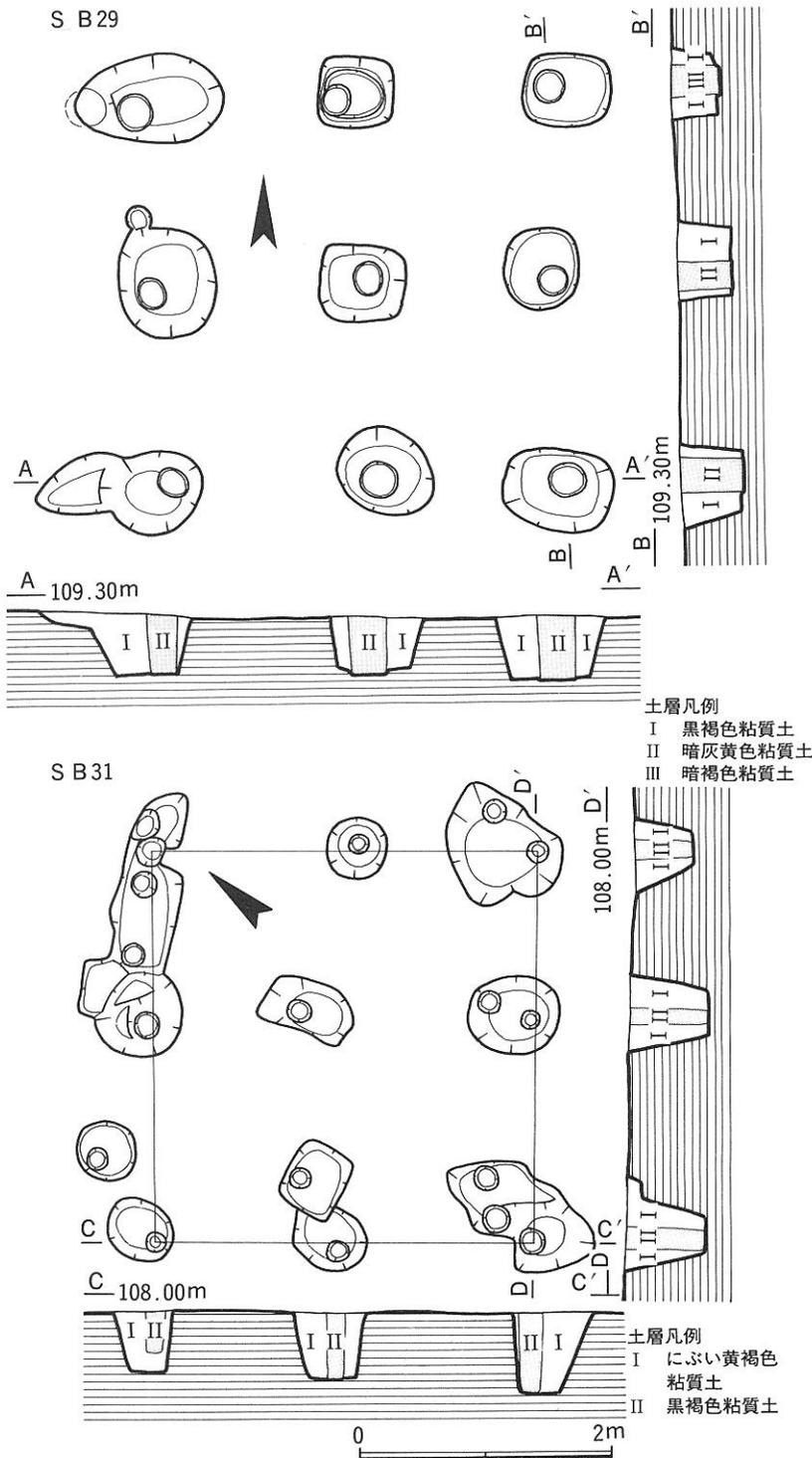
の柱穴に直径20~25cmの柱痕が確認された。中には、柱根が遺存する柱穴、版築状の土層を示す柱穴も存在する。柱間は1.5~2.7mであり、一定ではない。北側中央の柱穴埋土から須恵器片(第19図58)が出土した。

S B 27 (第9図) S B 27と同様に柱穴および建物規模から、古墳時代の掘立柱建物跡と判断した南北2.9・東西2.7mの規模をもち、柱間は1.3~1.6mである。柱穴は直径30~50cmであり、柱痕は確認できなかった。

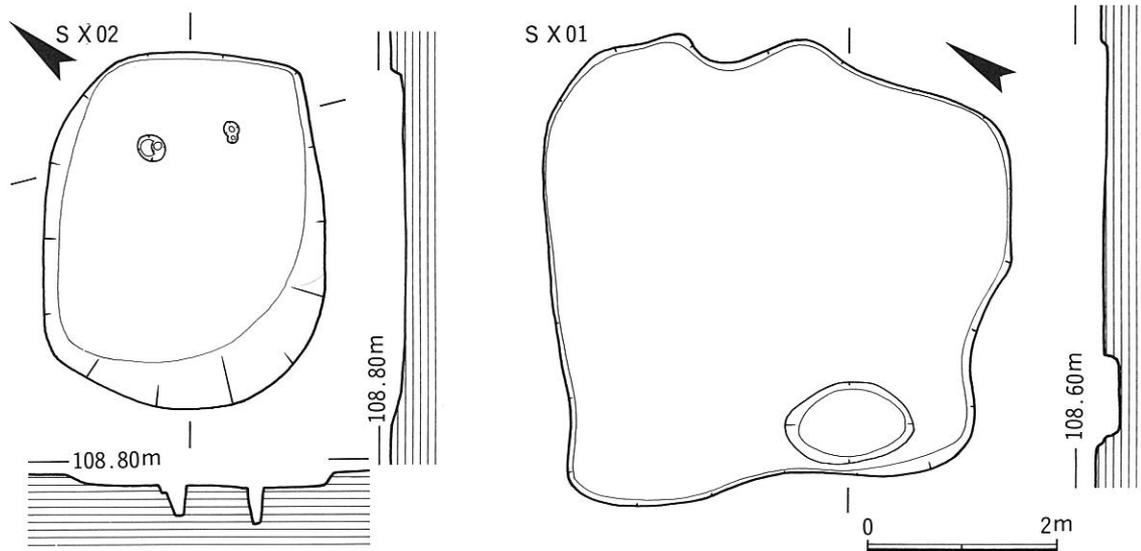
S B 30 (第9図) S B 27と同様に柱穴および建物規模から、古墳時代の掘立柱建物跡と判断した。南北2.9・東西2.7mの規模をもち、柱間は1.3~1.6mである。柱穴は直径30~50cmであり、柱痕は確認できなかった。

S B 29 (第10図) 南北2.9・東西2.7mの規模をもち、柱間は1.3~1.7mである。柱穴は方形基調のものが多く、柱痕が確認できた。北西隅の柱穴埋土から須恵器碗片(第16図57)が出土した。

S B 31 (第10図) 建てかえの可能性のある例である。南端の柱穴埋土から須恵器杯身片が出土した。



第10図 古墳時代の掘立柱建物跡実測図②

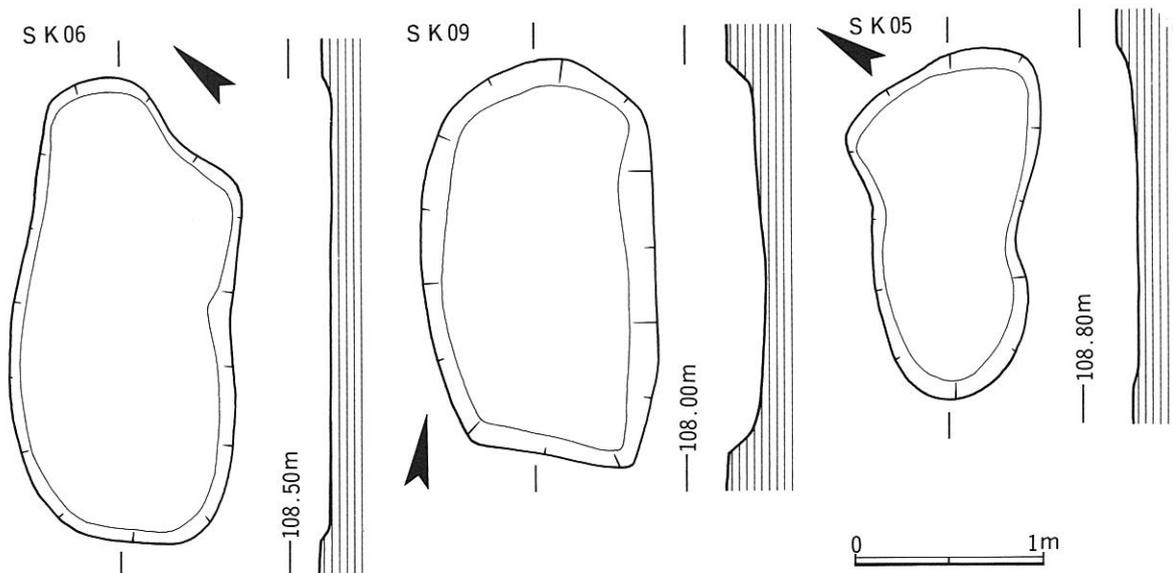


第11図 不明遺構実測図

(3)不明遺構

S X 01 調査区北側中央に位置し、わずかに底面を残すのみである。南側壁際に土坑を有する。出土遺物も少なく、時期・用途は不明。規模、形態から竪穴建物の可能性がある。

S X 02 S B 08・S B 09の東側に隣接し、S B 10が北側の一部を掘り込む。埋土中に多量の土師器を含む。投棄坑的な要素が強い。北側底面から柱穴が検出されたことから竪穴建物の可能性もある。

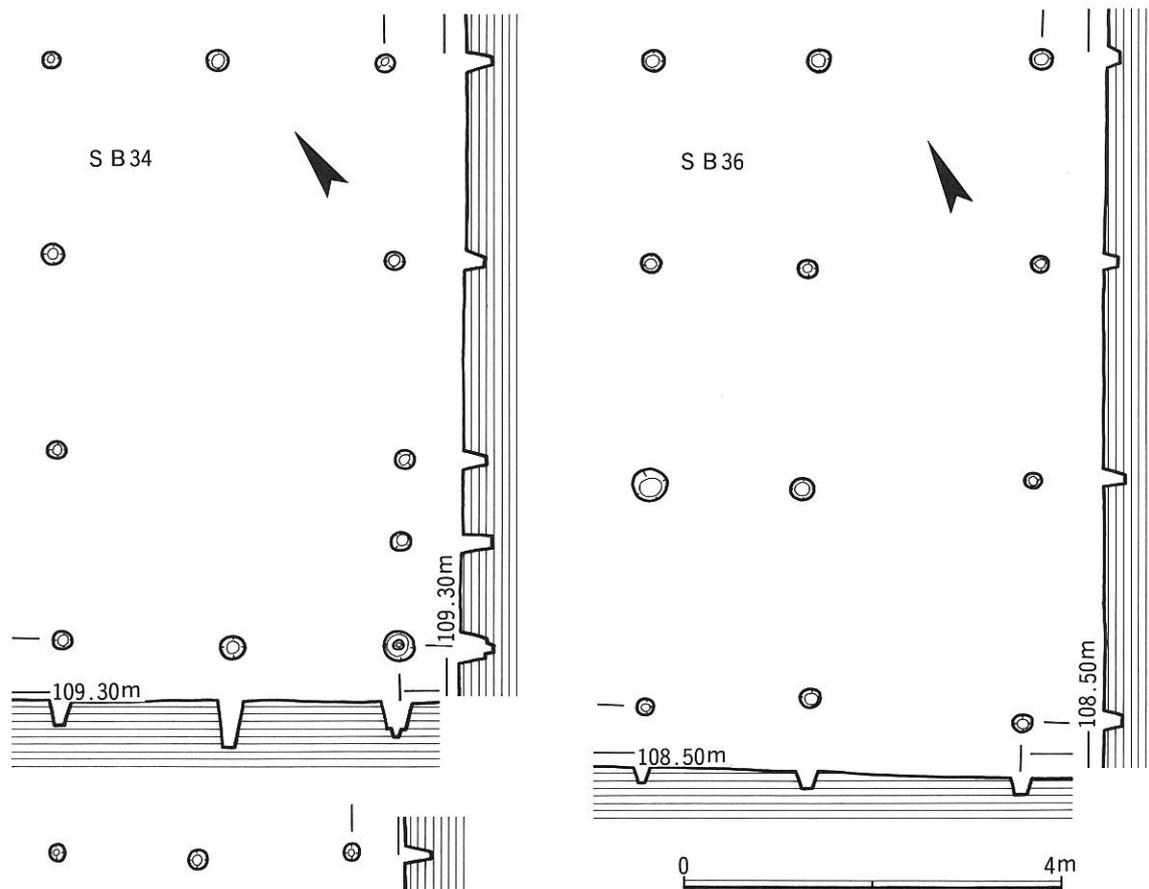


第12図 土坑実測図

(4)土坑

検出した土坑のほとんどは、後世の削平を受け底面部がわずかに残っているものである。そのため遺物が少なく、大半は時期や用途について不明である。平面形は、円形4基・長円形2基・楕円形2基・不整形1基である。

S X 09 検出した9基の土坑のうち唯一、時期が特定できるものである。調査区南東端にあり、平面形は長円形、長軸は210cm、短軸は124cm、深さ20cmである。底面から7世紀前半の須恵器の杯身(第16図28・29)が出土した。



第13図 中世の掘立柱建物跡実測図①

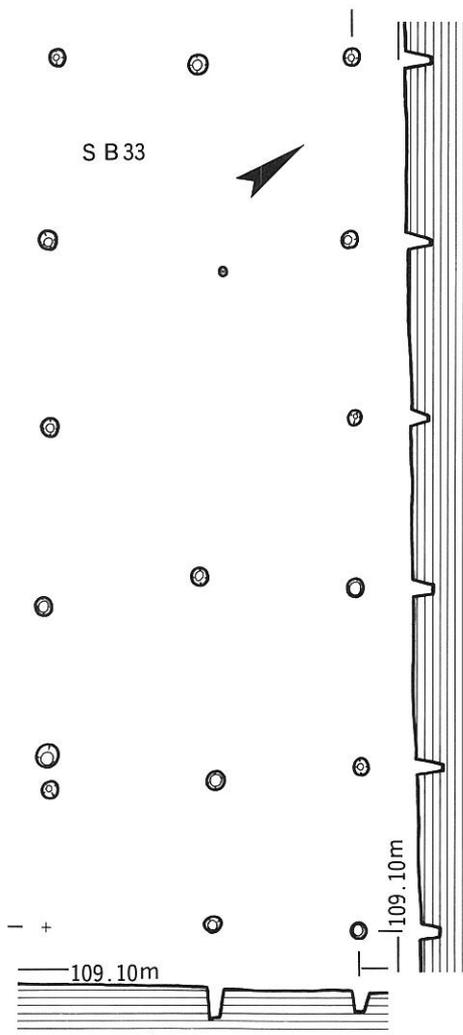
(5) 中世の掘立柱建物跡

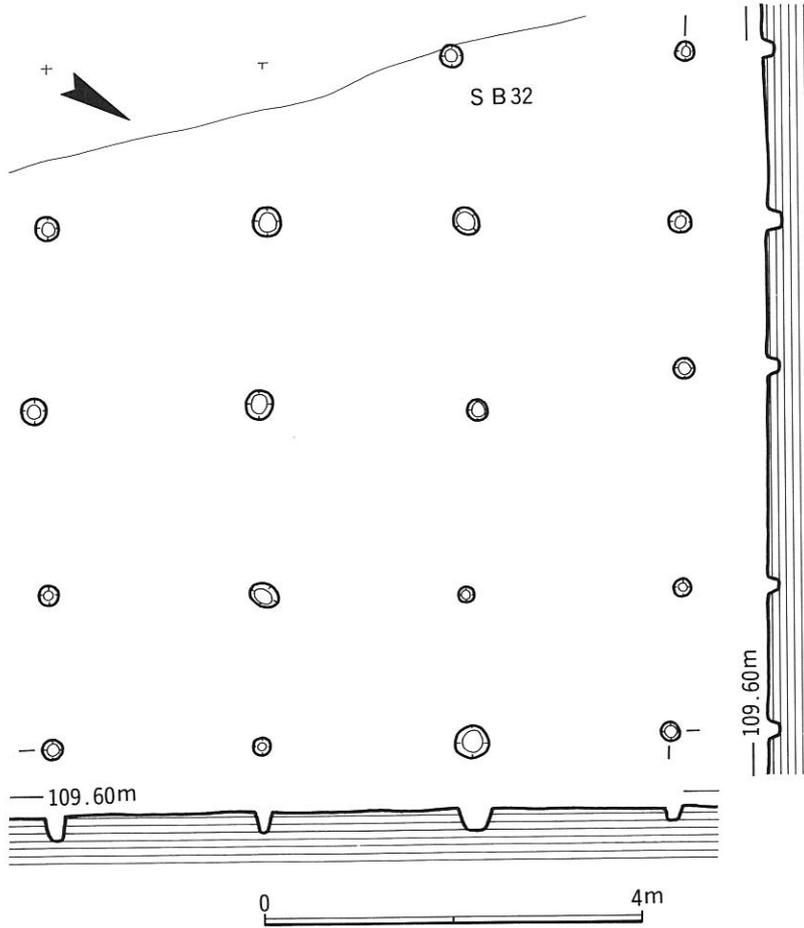
今回の調査で中世の掘立柱建物を5棟復元することができた。出土遺物や建物の規模・軒方向から5棟とも12世紀から13世紀のものと思われる。住居を取り囲む溝等は確認できなかった。

SB32 調査区南端に位置し、現状では4間×3間の総柱大型建物である。南側が調査区外にかかり柱穴の確認ができないため、さらに桁行が延びる可能性がある。桁行7.2m、梁行6.5mで、桁行の軸方向はN58°Eである。柱間の平均は桁行方向1.8m、梁行方向2.1m。削平を受け柱穴の深さは全て20cm前後である。

SB33 調査区中央に位置する2間×5間の建物である。桁行9.5m、梁行3.2~3.3mで、桁行の軸方向はN55°Wである。桁行方向の柱間の平均は1.9mである。柱穴の規模は直径18~26cm、深さ22~34cm。

SB34 SB33の南側に隣接する2間×3間の建物である。桁行6.2m、梁行3.6mで、桁行の軸方向はN35°Eで





第14図 中世の掘立柱建物跡実測図②

ある。柱穴の規模は直径18~32cm、深さ20~51cm。S B 33と隣接し、それぞれ柱穴から出土した遺物が同時期であることから、並存して建っていた可能性が高い。

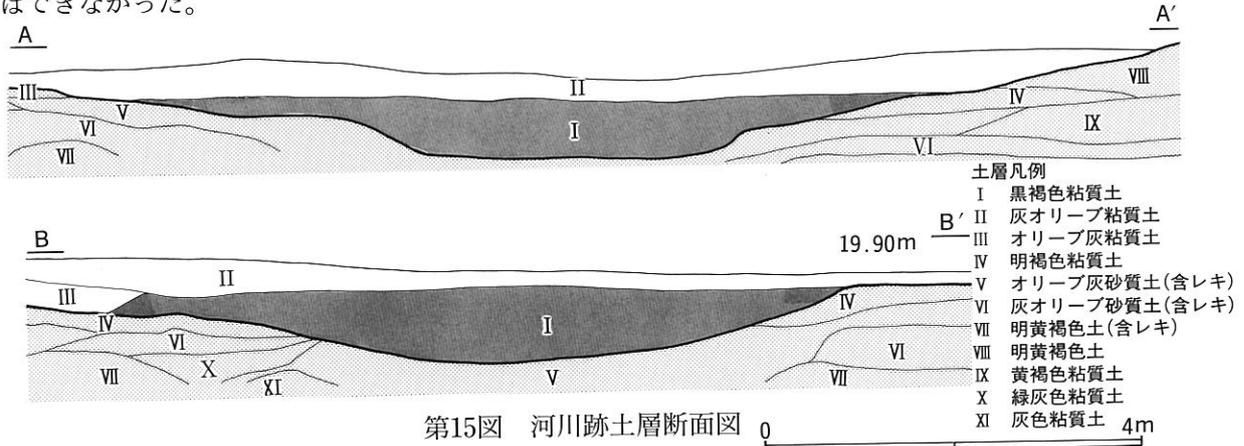
S B 35 S B 33・S B 34の南側に位置し2間×3間の建物である。桁行6.1 m、梁行4.8 mで、桁行の軸方向はN45° Eである。柱穴の規模は直径18~43cm、深さ20~45cm。柱穴(S P 02)から13世紀の土師器の皿(第19図63)が出土した。

S B 36 調査区の中央よりやや南東の位置にある2間×3間の建物である。桁行6.9~7.1m、梁行4.0~4.2

mで、桁行の軸方向はN29° Eである。柱穴の規模は直径18~36cm、深さ13~31cm。柱穴から土師器片が出土した。

(6)河川跡

河川跡と思われる黒褐色の土層の落ち込みが調査区南西側を東西方向に横切るようにして見つかった。トレンチ調査の結果、幅約9 m、深さ約80cm、川底からは木片が確認できただけである。はっきりした時期はわからないが、河川跡の埋土より上に平安時代の遺物を含む層があることから、それ以前のものであると考えられる。また、河川跡は調査区外に延びているため、全容を明らかにすることはできなかった。



第15図 河川跡土層断面図

IV 遺物

平原遺跡から出土した遺物は、縄文時代から室町時代に及ぶ。具体的には、縄文土器・土師器・須恵器・手捏ね土器・瓦質土器・陶磁器などの土器類、支脚・鈴などの土製品、打製石斧・打製石鏃・石匙・叩き石などの石器、紡錘車・模造品・小玉などの石製品、鏃などの鉄器、鉱石などの金属関連遺物などである。

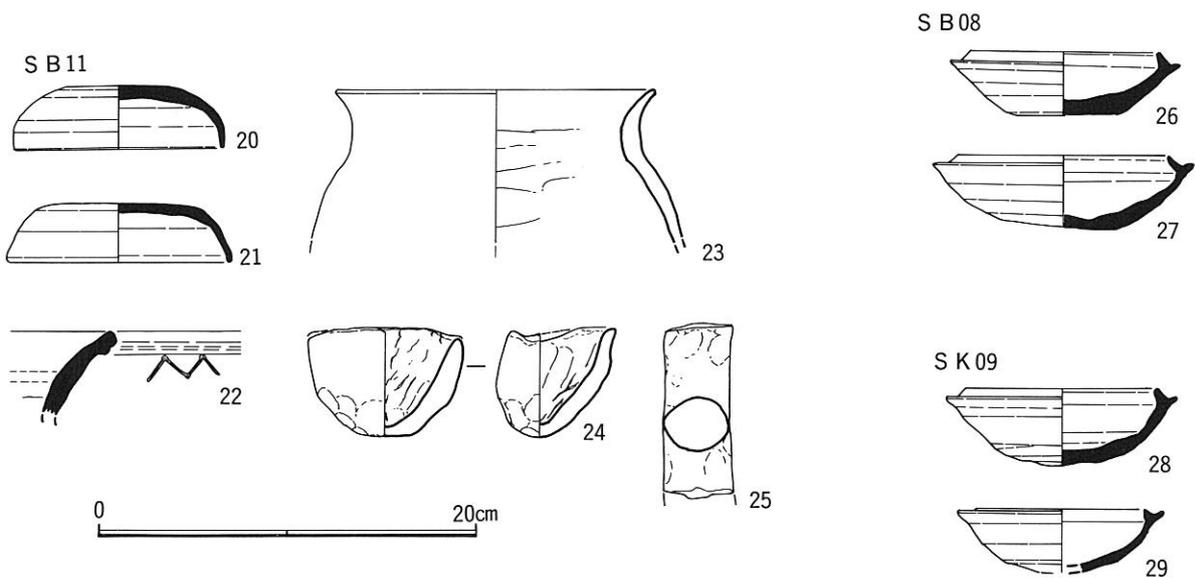
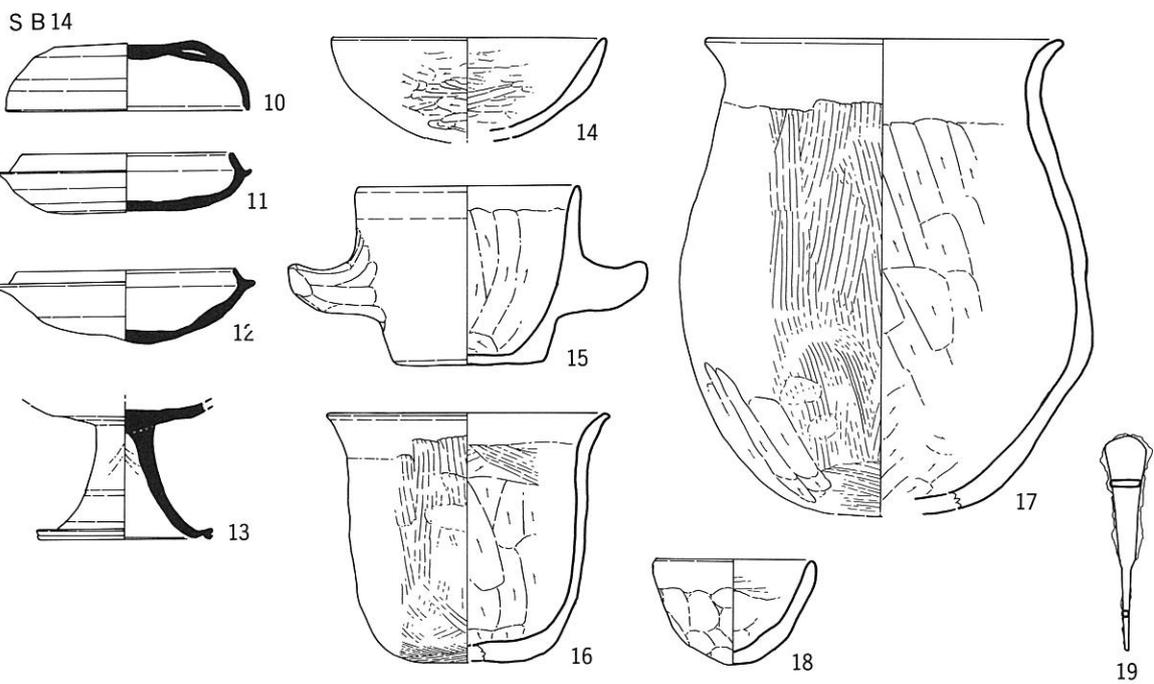
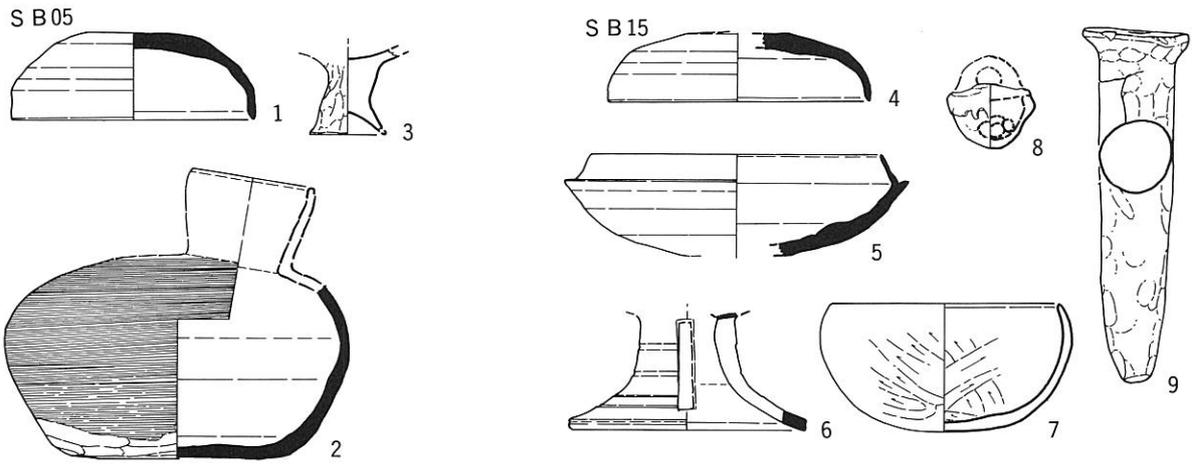
ここでは、出土遺物の大半を占める古墳時代後期の土器（土師器・須恵器）を中心に、竪穴住居跡から出土した一括性の高い遺物を主として紹介する（第16～19図）。なお、竪穴住居跡のうち数軒については、後世の削平によって良好な資料を得られないものも存在する。

S B 05（第16図1～3） 1は軟質であるため、器表は全体に磨滅している。天井部外面にはヘラ削りの痕跡が認められる。2は口縁部を欠失した平瓶であり、体部下端から底部外周にかけて回転ヘラケズリを施したのち、体部にカキメを施す。3は高杯形の手捏ね土器脚部であり、精良な胎土である。

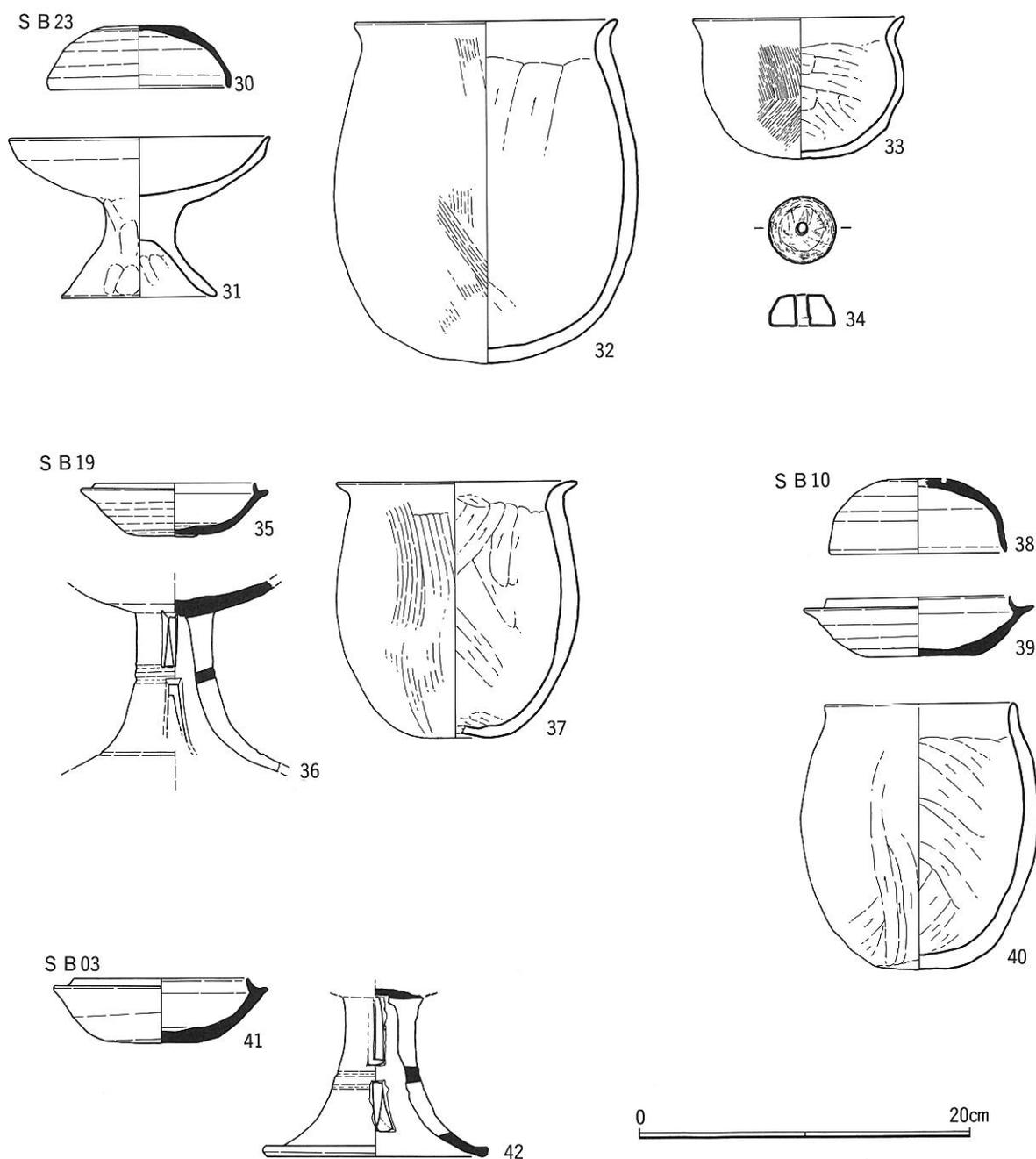
S B 15（第16図4～9） 4は口縁端部が丸味をもち、天井部外面をヘラ削りする。5は大型の杯身であり、立上りの薄さが特徴的である。6は高杯脚部である。透しは4方向と考えられる。7は椀であり、内外面をヘラ削りしたのち、口縁部周辺のみヨコナデする。8は中空の土製品であり、小型鉢状のものに板状の粘土を被せて密閉する。X線撮影によって、中に4個の小円礫または粘土塊が入っていることが判明した。平坦部に2か所の粘土剝離痕が認められることから、本来は鈕を有する土鈴であったと考えられる。9は土製支脚である。上端は平坦面を成し、下端は尖り気味である。竪穴住居跡の竈部分に約1/2を埋めた状態で出土しており、上半のみが二次加熱をうけている。表面には指頭圧痕がみられ、上端の平坦面中央にはわずかな凹みが設けられている。

S B 14（第16図10～19） 床面遺物の多くは竈周辺と南西部から出土した。10・11は南西部床面の周溝脇から、接する状態で出土した。その際、10は表向き、11は裏向きの状態であった。10は口縁端部が丸味を帯びた段をもち、天井部外面はヘラ削りする。一部に焼けぶくれがみられる。11は器高の低い杯身であり、底部外面にはヘラ削り後の板目圧痕が認められる。12は歪みのみられる杯身であり、底部外面をヘラ削りする。13は透しをもたない高杯であり、脚部の内・外面にはシボリ痕がみられる。14は器壁の厚い椀であり、内面はナデののちミガキ、外面はヘラ削りののちミガキを施す。15は南西部床面から出土した把手付きの鉢である。器壁の薄い底部は平坦で、穿孔等はみられない。内面にはヘラ削り、外面は粗いナデの痕跡がみられる。16は平底の鉢であり、内面をヘラ削りする。17は南西部床面から出土した丸底の甕であり、外面体部下端の一部にヘラケズリがみられる。18は鉢形の手捏ね土器であり、体部の内外に指頭痕を多く残す。19は竈煙道から出土した。方頭鏃に分類される鉄鏃であり、鏃身は平造で、全長11.4cmである。

S B 11（第16図20～25） 20・21は杯蓋であるが、20が口縁端部に平坦面をもち、天井部外面を回転ヘラ削りするのに対して、21は口縁端部が丸く、天井部外面切り離しののち静止ヘラ削りする。22は甕の口縁部であり、外面に鋭利な工具による「M」字状のヘラ記号が付される。23は北壁西寄りの床面から出土した。器表は磨滅しており、内面にはヘラ削りの痕跡がみられる。24は住居中央付近の床面から出土した鉢形の手捏ね土器である。乾燥時の変形のままに焼成されたようである一部には変形



第16図 出土遺物実測図①



第17図 出土遺物実測図②

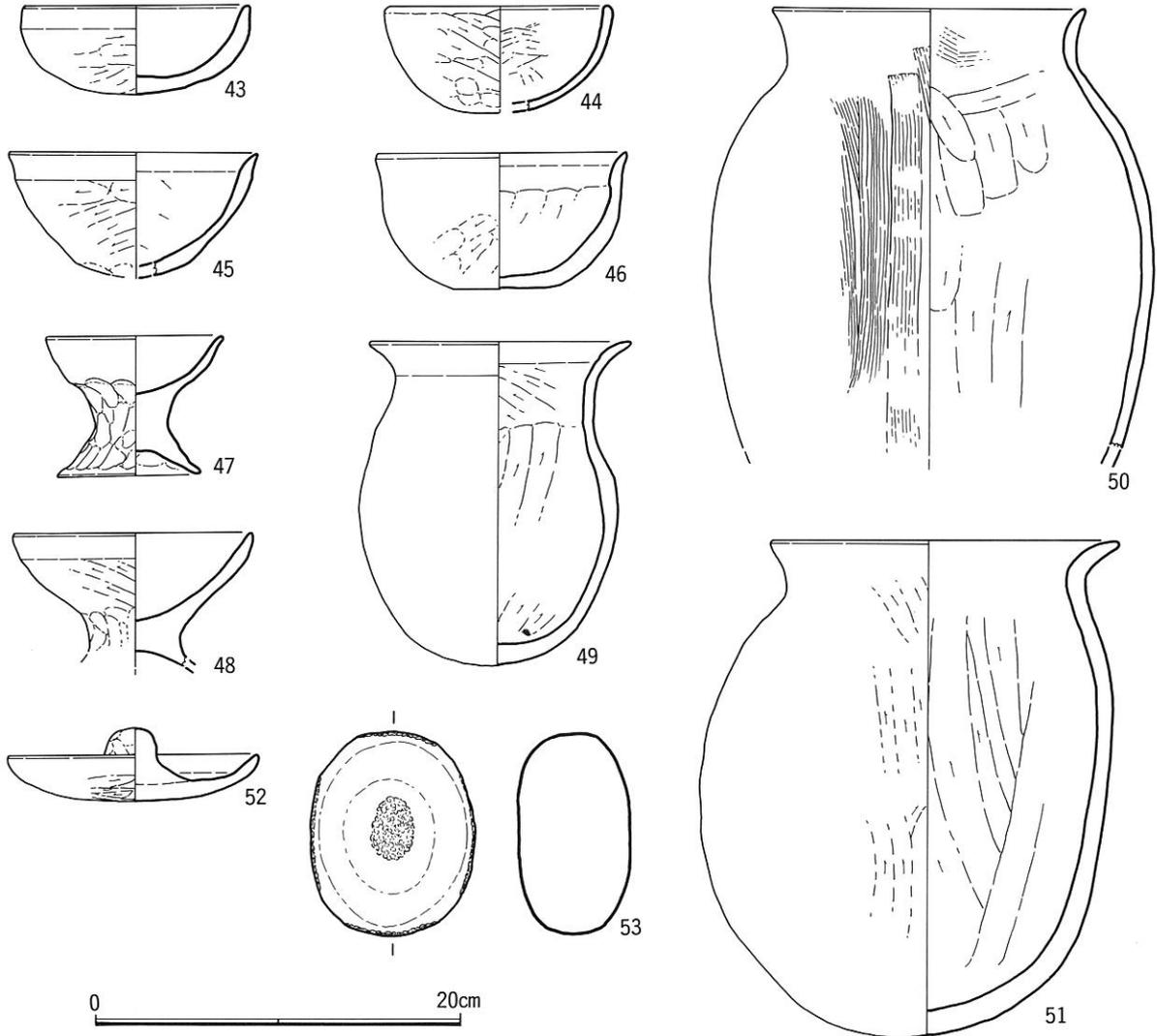
の際の亀裂がみられる。25は竈北側の床面から出土した土製支脚である。円柱状であり、表面には指頭圧痕がみられる。

SB08 (第16図26・27) 26・27ともに底部外面を回転ヘラ削りするが、いずれも平底傾向にある。

SK09 (第16図28・29) 土坑床面出土の遺物である。28・29とも小型化しており、立上りは短い。いずれも底部外面は回転ヘラ削りである。29は立上りの退化、器壁の薄さなどから蓋である可能性もあるが、外面に降灰がみられないことから杯身として扱う。

SB23 (第17図30~32) 30の天井部はヘラによる切り離しのままである。31・32は器表の剝落が著しく、調整の痕跡をほとんど留めない。31は竈東側から、32は竈内から出土した。33は竈内から出土した小型・薄手の甕であり、外面にハケ、内面にヘラ削りの痕跡をよく留める。34は住居南西隅の床

S X 02



第18図 出土遺物実測図③

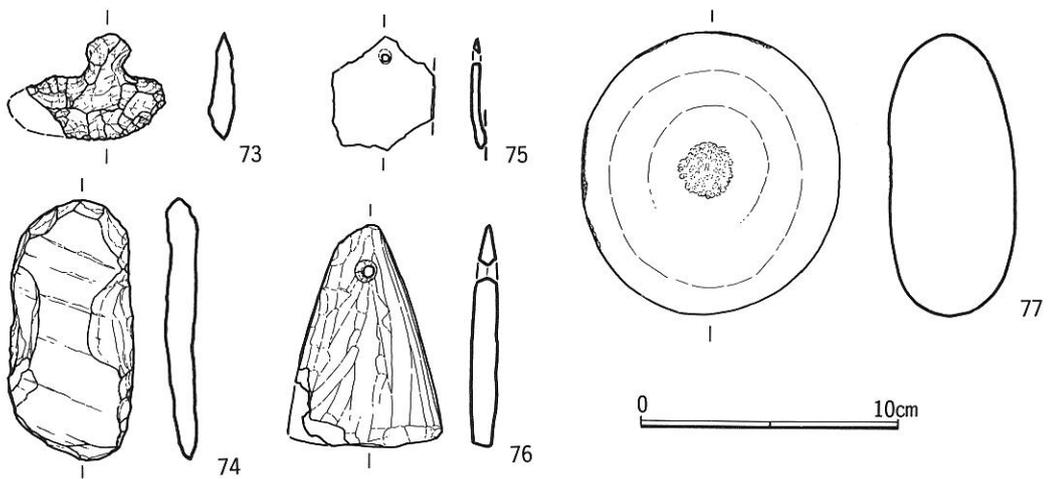
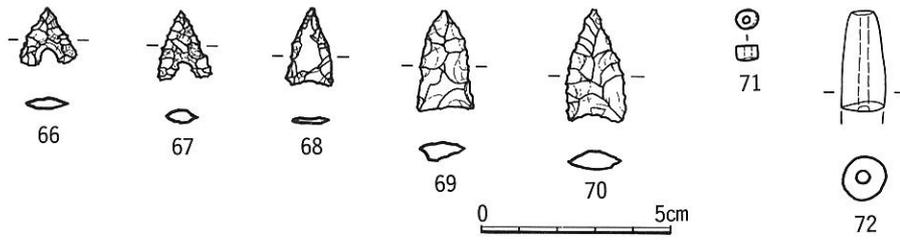
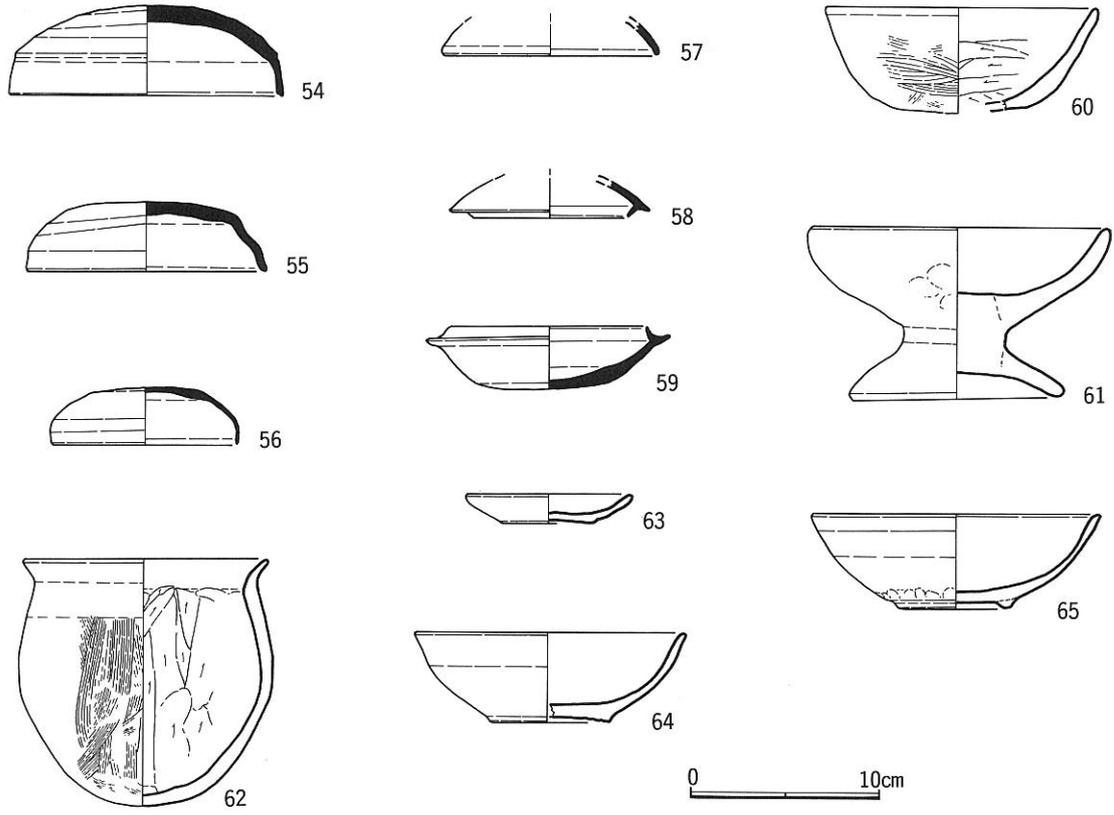
面から出土した滑石製の紡錘車である。表面は擦過痕が多く認められるものの、平滑に仕上げられており、削りに伴う平坦面は残さない。片面からの穿孔である。

S B 19 (第17図35~37) 床面遺物の多くは竈周辺から出土した。35は柱穴(P1)から出土した。底部外面は切り離しのままであり、切り離しに伴う粘土小塊が付着する。36は東側周溝脇から出土した高杯脚部である。透しは2段・2方向である。37は竈西側から出土した。内面にヘラ削り、外面にハケの痕跡をよく残す。

S B 10 (第17図38~40) 39の回転ヘラ削りを施した底部には、多くの擦過痕がみられる。

S B 03 (第17図41・42) 床面遺物の多くは竈内と竈東側から出土した。42は住居南東部床面から出土した高杯脚部であり、2方向に透しをもつ。41は竈東側から出土した。底部外面を回転ヘラ削りする。

S X 02 (第18図) 遺物は埋土中に多量に含まれて出土した。43・44は椀、45・46は鉢、47・48は高杯、49~51は甕、52は蓋状の製品である。53は円礫を利用した叩石である。



第19図 出土遺物実測図④

その他の遺物（第19図） 54～62は古墳時代の土器である。54は竪穴住居跡（S B02）からの出土であり、天井部外面をヘラ削りする。体部外面に稜をもち、口縁端部が段を成すなど、平原遺跡出土の須恵器としては最も古相を示す。55は竪穴住居跡（S B06）からの出土であり、天井部外面をヘラ削りする。一部に歪みがみられる。56は竪穴住居跡（S B20）からの出土であり、小型・薄手である。天井部外面をヘラ削りする。57は倉庫と考えられる掘立柱建物跡（S B29）の柱穴のひとつから出土した杯蓋片であり、口縁端部は丸味をもつ。58は倉庫と考えられる掘立柱建物跡（S B28）の柱穴のひとつから出土した杯蓋片である。小型・薄手で、かえりの付く杯蓋片であり、平原遺跡の遺構から出土した須恵器としては最も新しい時期のものである。59は竪穴住居跡（S B13）から出土した。平底気味の底部外面には回転ヘラ削りの痕跡がみられる。60は竪穴住居跡（S B24）の竈内から出土した椀である。外面はハケののちナデ、内面はヘラ削りを行う。61は竪穴住居跡（S B04）から出土した高杯である。器表は磨滅が著しく、調整の痕跡を留めない。62は竪穴住居跡（S B16）から出土した小型の甕である。外面には細かいハケ、内面にはヘラ削りの痕跡がよく残る。全体に丁寧なつくりである。

63～65は中世の土師器である。63は柱穴（S P02）から出土した皿である。橙色の精良な胎土を用い、底部外面には回転糸切り痕が残る。64は柱穴から出土した杯であり、胎土・切り離しとも63と同様である。65は柱穴（S P01）から出土した椀である。灰白色を呈し、軟質であるため器表は磨滅している。高台は貼り付けであり、外面の高台脇には貼り付けの際の指頭圧痕がみられる。切り離しは不明である。

66～70は打製石鏃である。いずれも古墳時代の竪穴住居跡の埋土中や遺物包含層からの出土であり、遺構に伴うものではない。66は黒色の黒曜石、67灰色の黒曜石、68灰色のチャート、69・70は安山岩を石材として用いる。

71は遺物包含層から出土した滑石製の小玉である。両端部は平坦で、両面から穿孔する。

72は遺物包含層から出土した管状の土錘である。

73は遺物包含層から出土した石匙である。安山岩を石材とし、一部折損する。

74は遺物包含層から出土した打製石斧である。塩基製片岩を石材とし、一部には使用の結果とみられる刃部の摩耗がみられる。

75・76は滑石製模造品である。75は竪穴住居跡（S B07）からの出土であり、二次加熱によるとみられる剝離のため、その原形を知ることはできない。76は遺物包含層からの出土であり、遺構検出の際に一部を欠失した。両面穿孔であり、全面に工具による削り痕が残る。

77は竪穴住居跡（S B06）から出土した叩き石である。円礫を利用しており、使用の痕跡はあまり顕著でない。

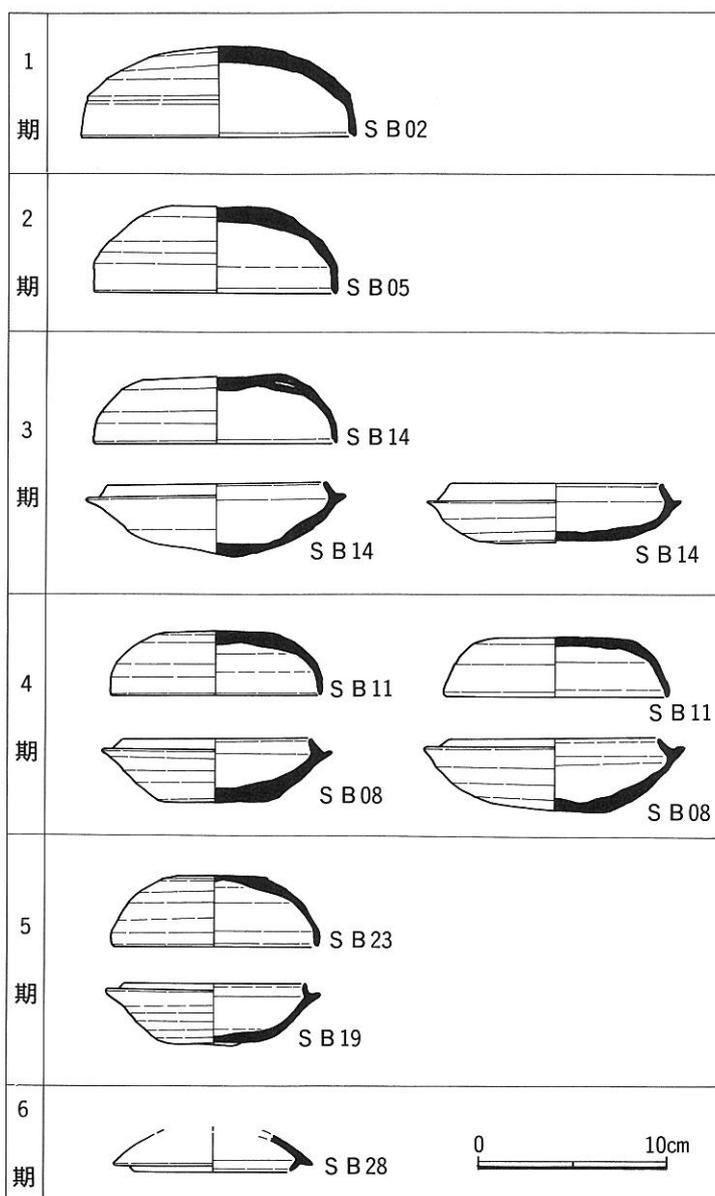
以上の遺物以外にも、銅鉍石・製塩土器などの注目すべき遺物があり、以下に紹介しておく。銅鉍石は竪穴住居跡（S B07）から出土した。淡緑色の酸化銅の小塊が1点だけ発見された。平原遺跡では唯一の例である。また、遺物包含層からではあるが、スラグもわずかながら出土している。製塩土器は遺物包含層から出土した。いわゆる美濃湾浜式土器の脚部先端である。これもわずか1点であるが、瀬戸内海沿岸地域と内陸地域のつながりを想定させる遺物である。

V まとめ

平原遺跡は古墳時代後期および中世の集落遺跡である。遺構は古墳時代後期の竪穴住居跡を主とし、出土遺物も当該時期のものが卓越する。このことを踏まえ、特に古墳時代後期の集落について、今回の調査によって得られた知見のいくつかを整理し、まとめとしたい。

遺跡の検討の前提として、時期決定の基準とした須恵器について触れたい。平原遺跡出土の須恵器（杯身・杯蓋）は第20図のような変遷をたどる。1期は稜をもつ杯蓋の段階であり、法量が大きく丁寧な作りである。2期では杯蓋の稜が失われて、やや小径化する。1・2期では杯身に良好な資料がない。3期では杯蓋の天井部が平坦化し、杯身の底部は丸底傾向を示す。4期は杯蓋の口縁端が丸くなり、杯身底部が平底化する。5期では杯蓋天井部・杯身底部とも平坦となり、ヘラによる切り離しのまま削りを行わないものがみられる。6期では杯身・杯蓋が逆転する。この期の杯身は良好な資料に恵まれない。1～6期は陶邑編年のII-2～III-1の段階に相当すると考えられ、実年代を当てはめれば6世紀中葉から7世紀中葉にかけての時期と考えられる。

古墳時代の遺構で注目すべきものに掘立柱建物跡がある。調査区の東側に5棟が集中して発見された。なお、S B31は2棟が重複していると考えれば、6棟であった可能性もある。いずれも2間×2間の総柱建物であり、倉庫としての機能が想定できる。掘立柱建物跡は2期・5期・6期に各1棟（S B31・S B29・S B28）が確認できる。時期不明の掘立柱建物跡が2棟ないし3棟存在することから、あるいは各期に1棟が存在した可能性もあろう。県内での掘立柱建物跡の類例は下関市・綾羅木郷遺跡、山口市・西遺跡、周東町・四割遺跡などにあるが、時期不明のものがほとんどである。最も多く発見された西遺跡では8棟発見されており、全て第IV地区東部に集中する。時期は7世紀前半であり、平原遺跡とも遺構配置や時期の面で類似性が高い。



第20図 遺構出土の須恵器組列

平原遺跡は住居（竪穴住居跡）と倉庫（掘立柱建物跡）が同一遺跡内において発見され、両者の時間的・空間的関係を把握できる点で重要である。竪穴住居跡を時期ごとにみれば、1期に1軒、2期に2軒、3期に4軒、4期に4軒、5期に6軒が確認でき、6期では確認できない。このことから、平原遺跡の集落は3期～5期が最盛期であったと考えられ、6期に突如衰退したことを示している。竪穴住居跡の大半は調査区の東部に集中する。そして、重複するものがある反面、掘立柱建物跡の周辺には基本的に竪穴住居跡が存在しない。あたかも、倉庫を中心としてこれを囲むように住居が存在し、住居・倉庫とも建て替えを繰り返しているかのようである。この場合、倉庫は集落内においては特別な意味を持っていたと考えられ、協同で管理すべき施設であった可能性が高い。

次に、銅生産との関わりについて考えてみたい。秋吉台東麓にある平原遺跡は秋吉台周辺に広く分布する接触交代鉱床の範囲に含まれると考えられ、古代銅山として著名な長登銅山と至近の距離にある。美祢市・上ノ山遺跡、秋芳町・中村遺跡、同・国秀遺跡、同・嘉万西遺跡などのように、秋吉台周辺では古墳時代にさかのぼる、銅を中心とする金属生産が広い範囲で行われていたことが明らかになってきた。したがって、本遺跡周辺もまた金属生産と無縁ではないと考えられる。事実、微量ながら竪穴住居跡（SB07）からは銅鉱石が出土している。しかし、他の遺構からは鉱石・スラグ等の冶金関連遺物が出土しないことから、本遺跡は直接的には金属生産に関っていないものと理解される。

県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の進展によって、秋吉台周辺の古墳時代集落遺跡には7世紀前半を境として消滅する集落と興隆する集落があることも明らかになってきた。平原遺跡・上ノ山遺跡は前者であり、中村遺跡・国秀遺跡・嘉万西遺跡などは後者である。このことは秋吉台周辺での人の移動を反映している可能性がある。仮りにこれを肯定するなら、7世紀半ばに秋吉台西麓の嘉万盆地へ、周辺地域から人口流入が起ったことを示している。その誘因として考えられるのは嘉万盆地における金属生産の開始である。金属生産に関しては、嘉万盆地の2遺跡（中村遺跡・国秀遺跡）から7世紀後半段階の銅塊が出土したことや、国秀遺跡の7世紀前半の遺構から銅鉱石や統一新羅系陶質土器が出土することがすでに知られている。いずれも長登銅山稼働の前段階の動向であり、8世紀前半と考えられる長登銅山の稼働に伴って8世紀半ばには嘉万盆地の金属生産遺跡もまた姿を消していく。このように、秋吉台周辺の古代集落は金属生産拠点の動向に影響され、移動を繰り返したと推定されるのである。

- 参考文献 (財)山口県教育財団・山口県教育委員会『中村遺跡』1987(山口県埋蔵文化財調査報告第100集)
(財)山口県教育財団・山口県教育委員会『国秀遺跡』1992(山口県埋蔵文化財調査報告第152集)
(財)山口県教育財団・山口県教育委員会『上ノ山遺跡』1994(山口県埋蔵文化財調査報告第168集)
山口県埋蔵文化財センター「嘉万西遺跡」『山口県埋蔵文化財センターニュース第6集』
美東町教育委員会『長登銅山跡II』1993(美東町文化財調査報告 第5集)

図版 1



平原遺跡遠景（南東から）



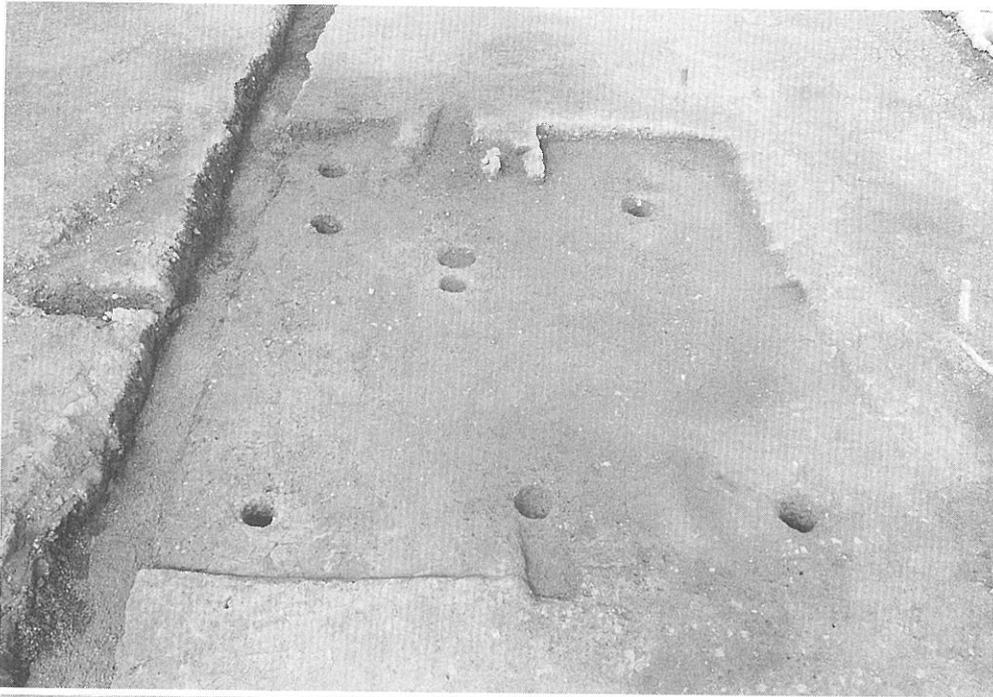
平原遺跡近景（北西から）



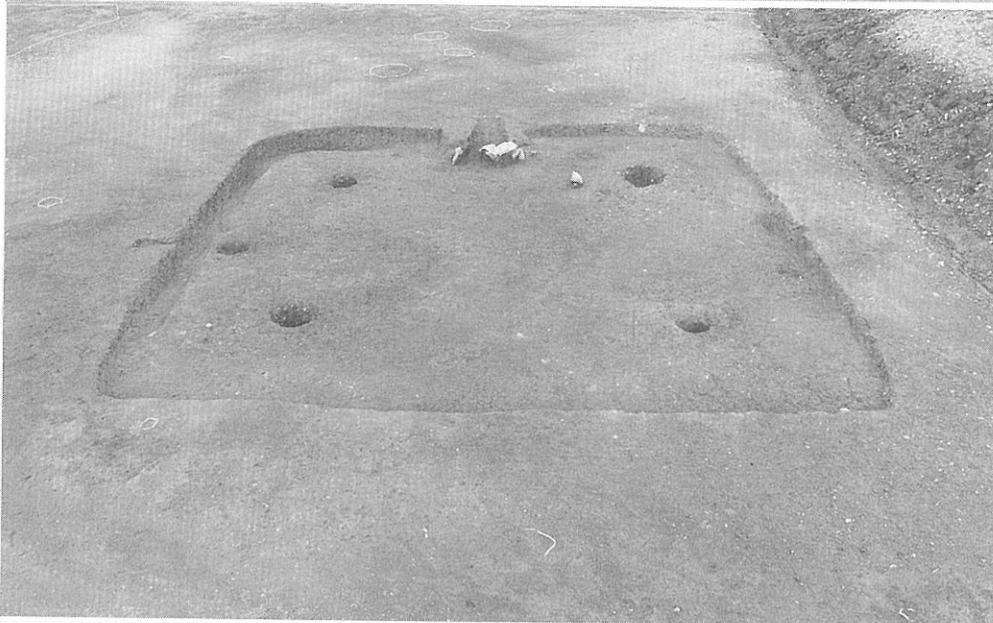
平原遺跡調査区全景



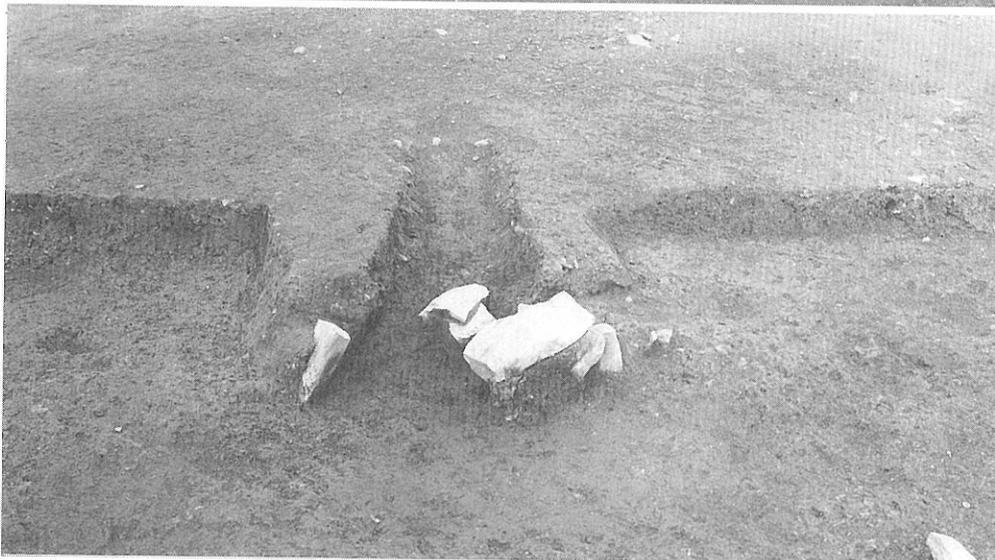
平原遺跡南東側住居群



S B01

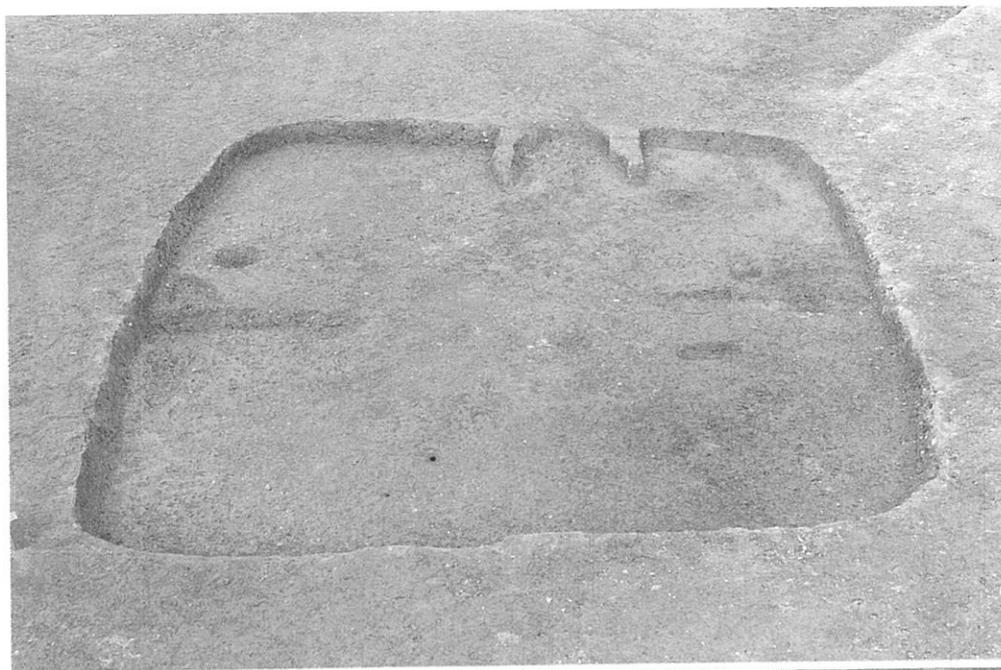


S B04

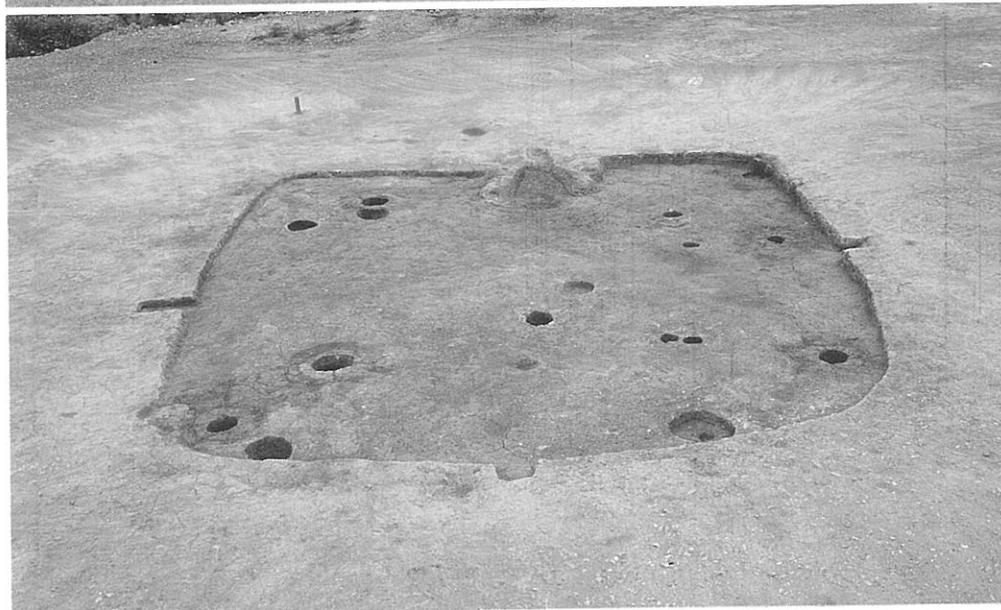


S B04竈

S B 03



S B 05



S B 05 竈





S B10



S B08



S B08竈



S B08土器出土状況



S B11





SB06(下SB07)



SB07



SB13

S B15



S B14

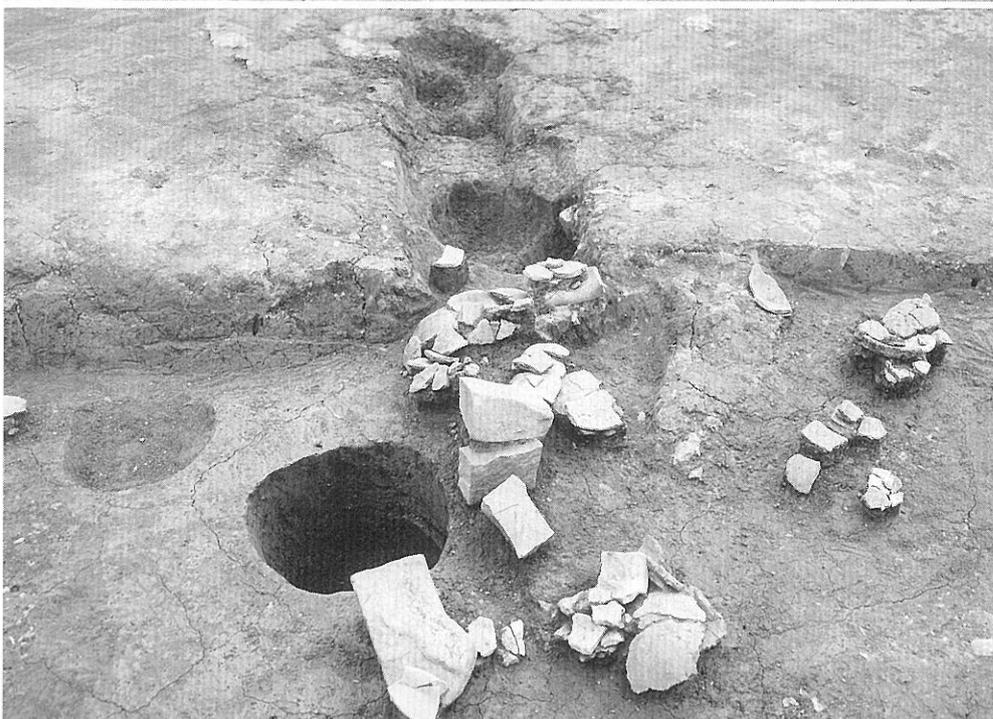


S B14土器出土状況





S B19



S B19竈



S B23・24

S B28



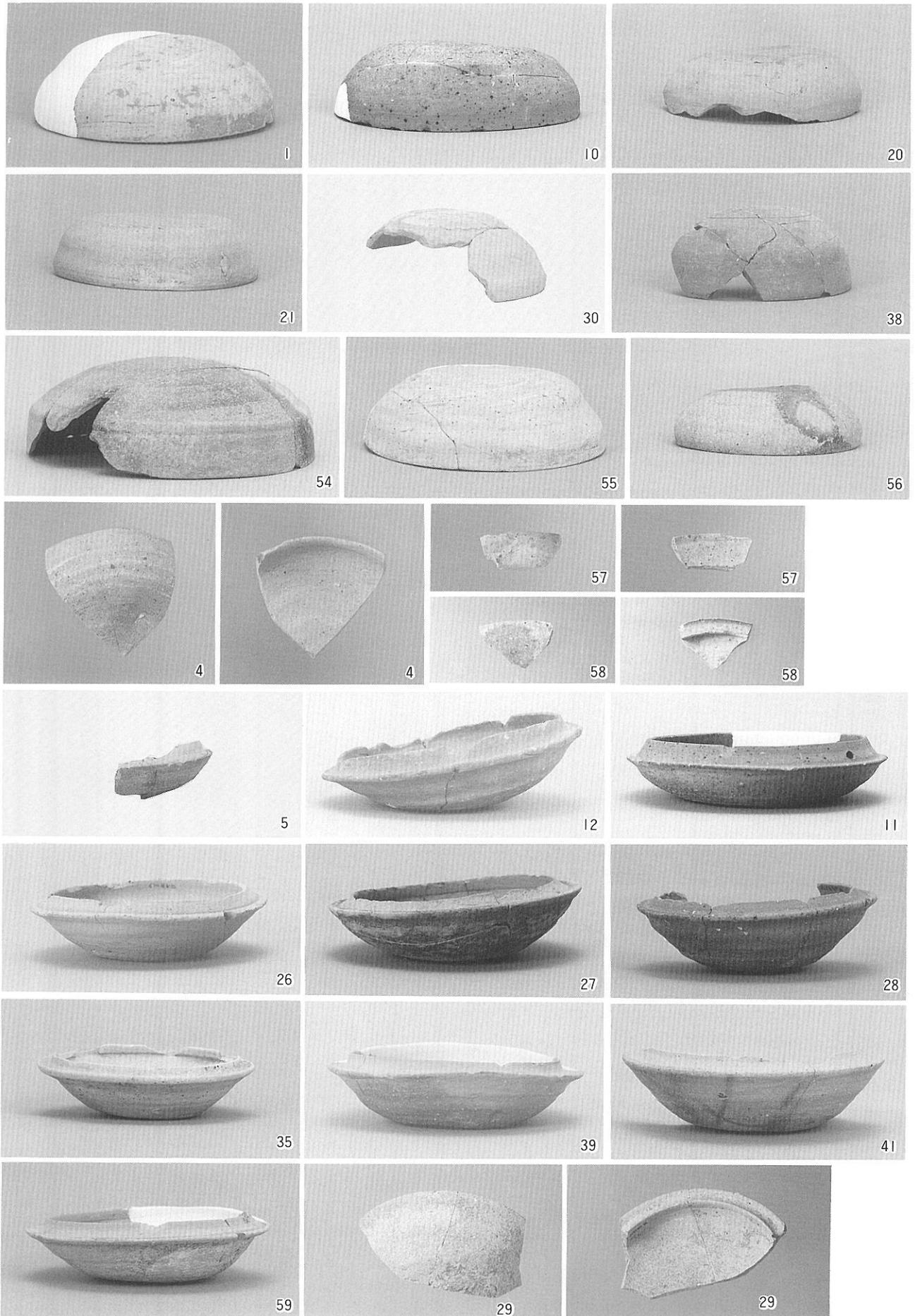
S K09

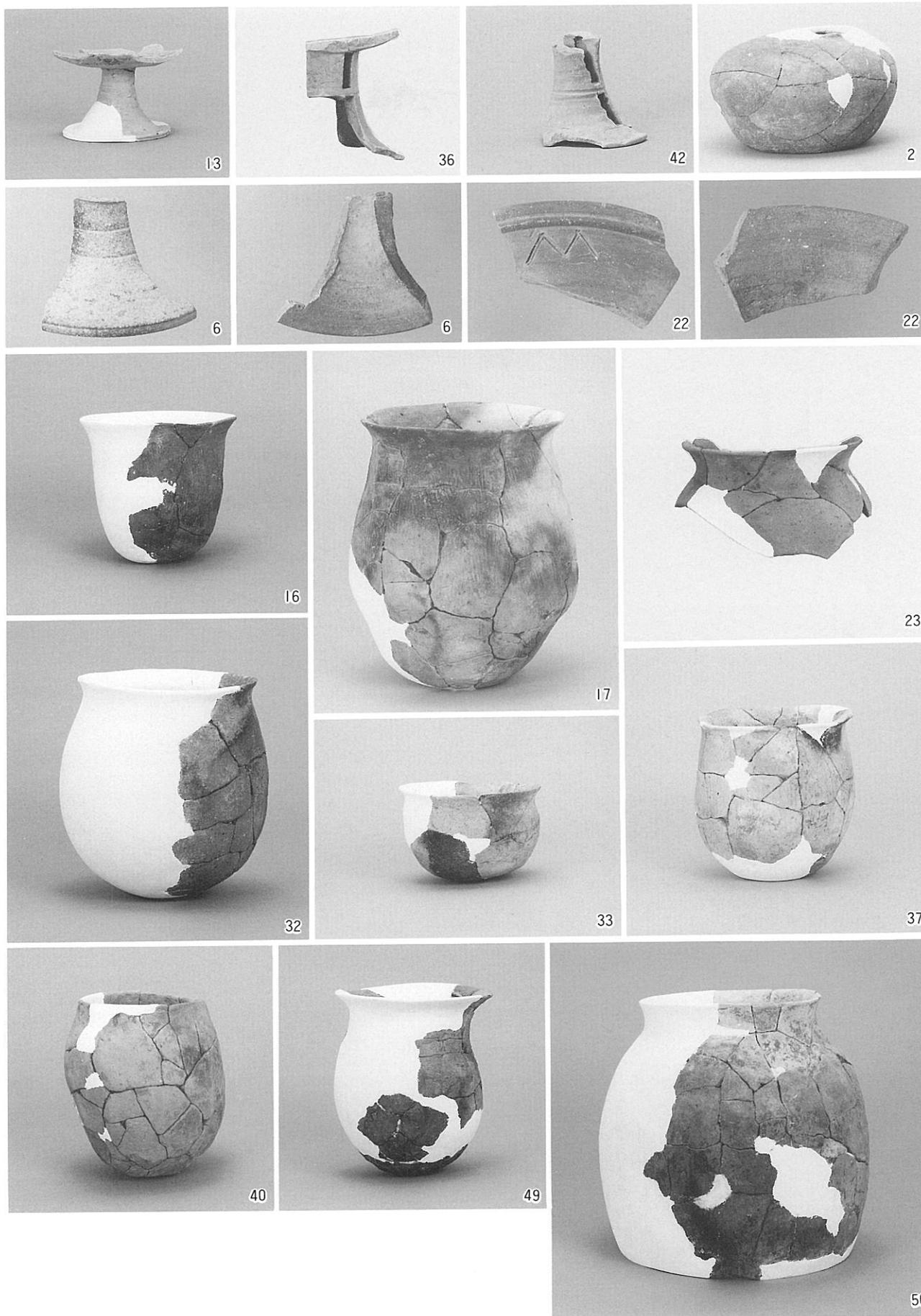


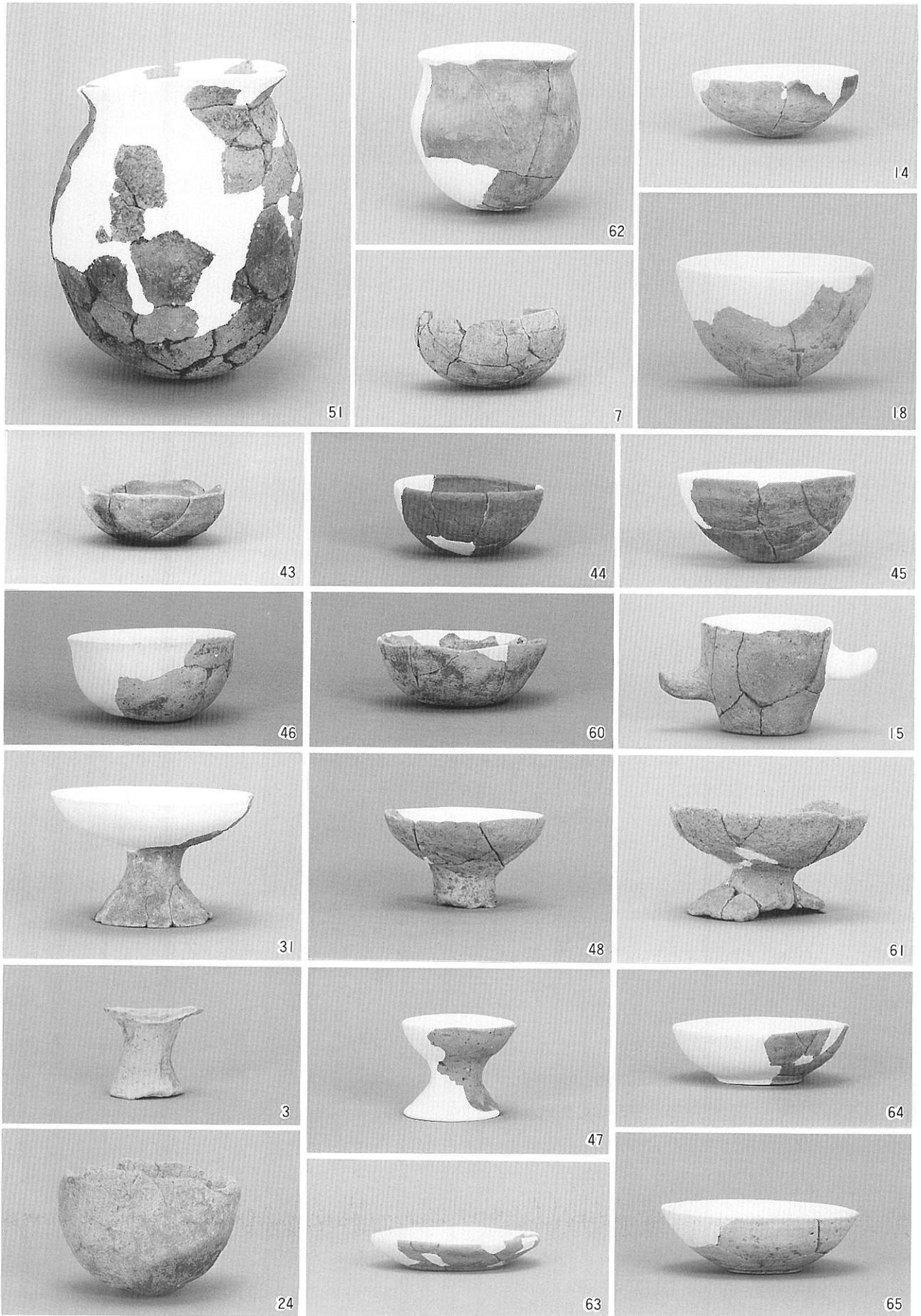
S B34

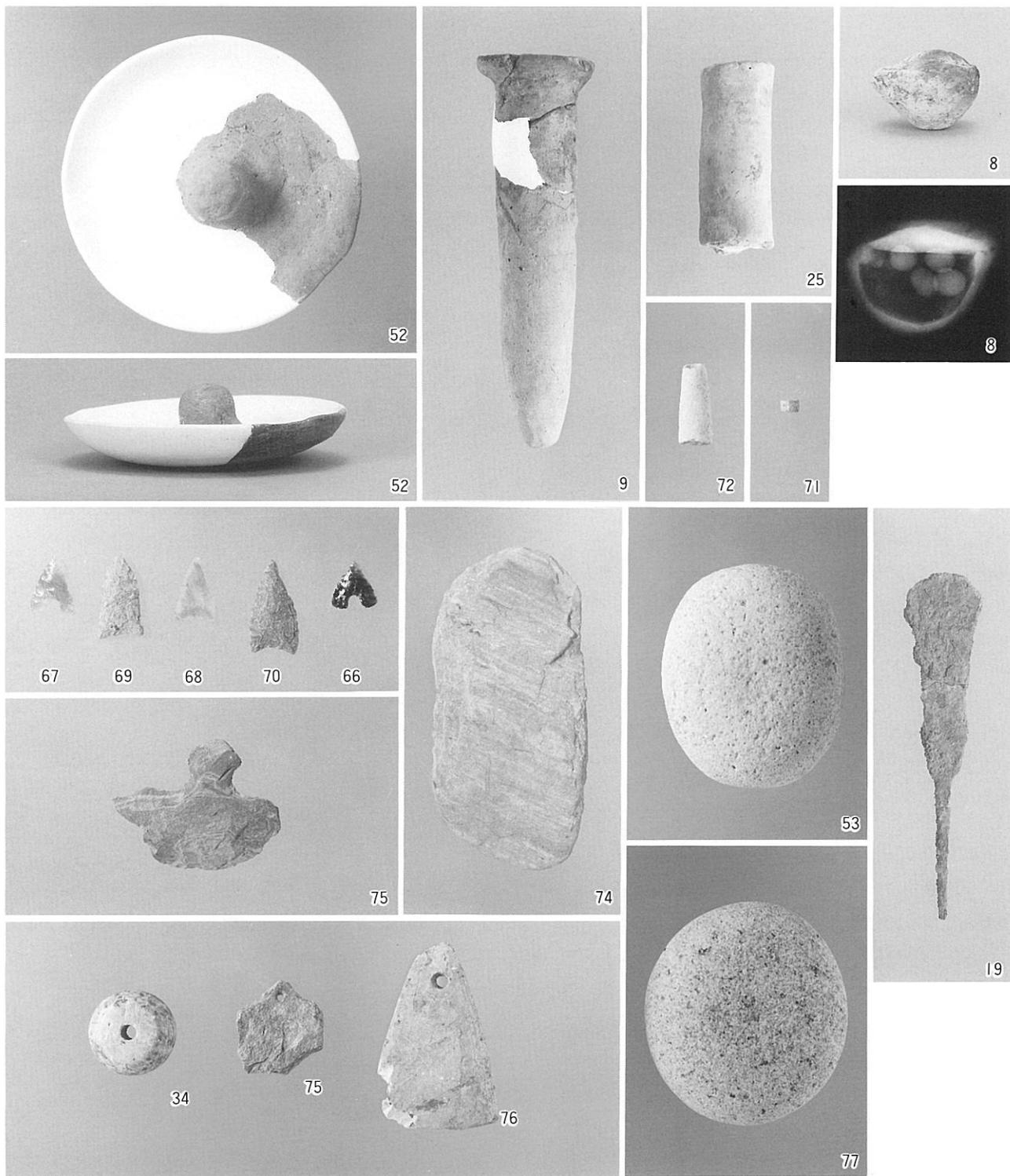


图版11









報告書抄録

ふりがな	ひらばらいせき
書名	平原遺跡
副書名	平成7年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第182集
編集著者名	岩崎仁志 山本義信 花岡隆義
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753 山口県山口市春日町3-22 Tel 0839-23-1060
発行年月日	西暦1996年3月19日（平成8年3月19日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらばらいせき 平原遺跡	みねぐんみとうちう 美祢郡美東町 おおあざおおだ 大字大田	35461		34°13'20"	131°20'17"	19950712 ～19951019	4,900	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平原遺跡	集落跡	古墳 中世	竪穴住居跡 26軒 掘立柱建物跡 5棟 土坑 9基 不明遺構 2基 掘立柱建物跡 5棟	須恵器、土師器、石器、 土製品、石製品	古墳時代と 中世の集落

山口県埋蔵文化財調査報告 第182集

平原遺跡

—平成7年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

1996年3月

編集 財団法人 山口県教育財団

(山口市大手町2130)

山口県埋蔵文化財センター

(山口市春日町3-22)

発行 財団法人 山口県教育財団

(山口市大手町2130)

山口県教育委員会

(山口市滝町1-1)

印刷 大村印刷株式会社

防府市西仁井令1丁目21番55号
